

四月七日 雨

終日、烈しく快き雨なり。

「創作」の選に心囚はれ、心くるしくすごせしが、折々にかきつけたる歌十首をこえたらむ。夜、起きて「金の船」の豫選を終る。

四月八日 晴

「創作」の選、午前。午後、土地郵便局の悴足立務君に誘はれて緒明別荘の湯にゆく。みごとなる別荘なり。

歌作四五首。

四月九日 晴、風

よく晴れよく吹けり。「創作」の選。午食後の散歩に木立の淵に赴き、歌かれこれ二十餘首を得たり。

大正十二年

六月十日

この朔日から急に起つた腹痛と下痢とがなか／＼にとまらない。まるつきり病人になつて寝てゐるのが不愉快ゆゑ多少不養生をしないでもないが、さればとて相當の手當はしてゐるのである。温泉に行つて温めたならば、と思ひ立つて長岡へ行くことにする。

途中、もと沼津の稻玉病院在任中始終かゝりついであつた塚田静保君が先頃三島町に轉じて開業中なのを訪ひ、診察を受け薬を貰つて長岡温泉橋木屋にゆく。

動いたゝめか、じか／＼と痛む。馴染の女中が心得てつけて来たお銚子を、斷り兼ねて飲む。ビールはいけませんが、熱いならば却つていゝ様である。

おなじく十一日

つとめて湯に入る。よく温まるが、同時にのぼせていけない。大きな湯あがりを取り寄せ、湯槽に添うて仰臥しながら、タオルを輪の様に巻いて腹部の

上に載せ、片手に小桶を持つて断えずその輪の中へ湯を注ぐ。三十分も續けてゐると、其處だけ赤黒く染まるまでにあつくなる。

午前一度、午後二度、夜なかに一度、これを繰返すことにした。

おなじく十二日

昨日から始めた方法がたいへんにいゝ様だ。すいてゐる時は一時間位もゆつくりとさうしてあたゝめるのだが少しものぼせない。そして痛みも次第にとれてゆく。

疲れが出て、湯に入つてゐない間は、たゞうとうとと寝てすやすや。降りつ晴れつ、寝ながらに見る向うの松山には日がさしたり、霧がかゝつたりしてゐる。折々、松蟬が鳴き、頬白の聲が聞える。

おなじく十三日

晴間を見て一二度小さな散歩を試みる。とりたての夏蜜柑が青い葉をつけたまゝ、店さきに並んでゐる

のを見ると自づからに唾が湧くが、流石に手をば出し兼ねた。

痛みだけは全くとれた。

おなじく十四日

正午前、只今お客様が驛（長岡驛）にお降りになりましたさうで其處へ出張つて居ります番頭から電話がありました、と女中が言ふ。

来たまゝで葉書一本何處へも出さないのにどうして此處にある事が解つたらう、誰であらうと待つてゐると、程なく来た。時事新報の沼津支局員T君——であつた。今日本社の方から今後の日曜附録の歌の選を御依頼する様にと云つて来ましたのでお宅へ伺ひましたらこちらだとこの事でしたから直ぐその足で廻りましたといふ。

同君は信州生れの人であつた。で、いつか其處の山や河の話が出て、久し振に大きな聲で笑つたりした。

おなじく十五日

未明に廁に行き、久し振に、さうだ丁度半月振に固體の落ちる音を聞いた。嬉しや／＼と思ふ。

午前、今日は遠く稚兒ヶ淵まで散歩する。鮒を釣つてゐた老爺の側に蹲んで一時間ばかりを過す。見ごとなのが三尾つれた。

もう少し此儘入湯して居たいと思ひながら、この分では東京へ行けると思はれたので、午後急に歸ることにした。

そして妻と二番目の娘とを伴れて上京することにした。

おなじく十六日

十時何分の汽車に乗る。眞木子は汽車が珍しいので大喜びである。妻とても沼津に来て四年間にこれが二度目の上京である。

品川驛まで長谷川銀作君が出てゐてくれた。東京驛に降りると、これはまた僅かの時間にどうして斯く打合せが出来たものか男女十二人かの人を迎へて

ゐて呉れた。立つたまゝ、簡単な挨拶をして我等と高久歌太君夫妻とは自動車で神田通新石町の同君宅に向つた。程なく電車であつた五人が落ち合つた。大勢しての夕食の時、初め心配しいゝ盃をなめてゐたが、終には平常どほりの速度となり、献酬が始まり、いゝ氣持に酔つてしまつた。そして皆の歸りを送ると號して附近のメトロポールといふカフェーへ出かけて赤電車まで飲んでしまつた。

おなじく十七日

ひどい雨である。降らねばいゝがと、けふの日取をきめる時から心配してゐたのに、梅雨らしくもな

い大降りとなつた。七時頃に美代かつ子山内眞珠子大村文子の婦人連來訪、妻と娘とを案内して今日の會場へ行くまでの時間に三越を見物しようといふ。實際妻はけふが日までまだ三越といふ所を一度も見ることがなかつたのである。

午前十一時、會場である瀧ノ川の楓樂園といふ所

へ行く。電車を降りてからの路の悪さは實に獯猛であつた。行つて見ると、我等が遅い組で、既に大勢の人が集つてゐた。

今日のこの會合は私の近著『山櫻の歌』の合評を行ふためのものであつた。初めこの本の出た時、祝賀會の様なものを開かうではないかといふ相談が我等の社中で行はれてゐるのを知つて、祝賀會はこの前の『くる土』の時に開いて貰つたので、今度は極く内輪だけの批評會といふものにして欲しいと頼み、今日の會合となつたのであつた。それでは場所も極く静かな所にするがよからうといふので、あちこちと探した末、この瀧ノ川の楓樂園と定められ、静かは静かだが、不便な所故、雨でも降つたらたいへんだと心配せられてゐたのに、選りに選つた大雨の當日となつてしまつたのであつた。

それにも拘らず四十三人からの出席者があつた。中には日光、宇都宮、千葉あたりの遠方から出て來て呉れた人たちもあつた。楓木立の深い奥の會場は、すぐ裏の崖下に川が流れてゐた。そして斷間ない雨

の音が、却つてあたりの静けさを増してゐた。

初め十四五人の人が次ぎ次ぎに立つて同書の歌に對する總評的感想を述べた。それが終ると各自が圓く席を作つて更にこまかに意見を述べ合ふことになつた。作者の私はともするとそれらに對して答辯をしたり、抗議を申し込んだりせねばならなかつた。すべてが深く知り合つた仲だけに一切儀禮拔すべきものであつた。

四五時間のあひだ、たるみなくそれが續いた。そして午後五時閉會した。幾らか小降りになつたなかを晚餐會場にきめられてあつた染井の躑躅園といふへ打連れて行つた。

二三時間で切りあげる豫定であつた其處での時間も、いつか十一時すぎまでも延びてしまつた。

おなじく十八日

今日は早速歸るつもりであつたが、折角出かけて來たのだから代々木の今井邦子さん世田ヶ谷の鷹野つき子さんを訪ねたいと妻が言ひ出した。どちらに

しても不便なところで、殊に雨は降るし子供連れではあり、今度は諦めたがいゝだらう、それとも邦子さんにだけなりと電話をかけてこちらに來て頂くかといふと、ではさうしませうといふことになつた。其處へ一人寄り二人集り、一昨日來の人たちが七八人集つて來た。程なく邦子さんも見えたが、これでは話も出來ないからと、とうとう妻は代々木まで誘はれて行つた。

晝食後、私はこの人たちを誘つて附近の小柳亭に講釋聞きに出かけた。難有いことに、典山がかつてゐた。沼津に移つた當座、この講釋場の、ことに晝席のないのが實に淋しかつたことなどを思ひ出しながら、久し振に晝席特有の静けさの中でしみじみと三四席のものを聞いた。

小柳亭を出て須田町の露月亭といふカフェーで麥酒を飲んで皆と別れた。そしてその中から三人の青年を呼び留めて、近所の中川牛肉店に行き、改めて飲み始めた。この三人は三人とも私と同じく日向の坪谷村に生れ、孰れも二十三四歳の青年で、いま打

揃うて大森の刃物工場の職工としてハンマアを振りながら熱心に歌を勉強してゐるのである。一體に私の村の者はよく飲むのだが、この三人もまたよく飲んだ。十本十五本二十本と竝んでゆく徳利の速さは壯快なものであつた。其處へ高久君と、昨日から同じく高久君の許に泊つてゐる鈴木菱花君と邦子さんの所から歸つて来た妻とがひよつこりやつて来た。餘りに遅いので心配して来たのであつた。なるほど彼等が来て直ぐ看板の時間となつた。

おなじく十九日

正午すぎの汽車で立つべく、十時頃丸の内ビルヂングに行つた。其處の或る事務所に務めてゐる長谷川銀作村松道彌の兩君にその建物を見物させて貰ふためである。そして其處を出て驛に行つた。

多分四五人の見送が来てゐるであらう、そして一緒に驛の食堂で簡単な食事でもして別れようと思つてゐたのであつたが、四五人はおろか二十人近い同志が集つてゐる。これではとても食堂などには行

つて居られない、何かいゝ方法はないものか、と村松君に相談すると、いゝ所がありますと言ひながら一同を案内して丸ビルの地下室花月の食堂に入つた。其處の一番奥に大テーブル二つを寄せ、茶飯附三十錢のおでんを取つて、盃を舉げた。

その間に不圖、私はいま沼津で私の借りて住んでゐる家主の宅が日本橋であつたことを想ひ出し、電話でも挨拶して行かうと電話をかけた。向うでは非常に驚いた、そして是非寄つて呉れと云ひ出して、どうしても承知しない。止むなく一汽車だけ豫定より遅らす旨を一同に云つておいて妻と子供と三人俤で呉服町のその宅まで出かけた。ほんの挨拶だけで引返すつもりで俤をも待たせておいたのにそれはいつか返してしまはれ、一通りの挨拶が済むか済まぬに膳が出た。そしてどうでも今夜は一晚だけ泊つて行つて貰はねばならぬといふ。驚いていろゝと辭退したが、結局私たちがまけてしまつた。改めて俤を雇つて貰ひ大うらたへで驛まで出かけ、其處に待つてゐて呉れた大勢の人に呉々も詫びを言つて、ま

た呉服町に引返した。

主人のM——氏また酒を愛した。そしてそれから延びて盃を集むる事に興味を覚え、今では各地の名ある陶器や、支那あたりの古いものなどを四百個以上も集め得て綺麗な箱に納めてゐる。一つ一つと見てゆくと、まことに面白いものがあつた。

おなじく二十日

九時それがしの汽車でいよゝ／＼立つことになつた。車室に入つて見ると加藤武雄君が腰かけてゐた。鶴沼まで行くといふ。其處へ、いま驛の自働電話で大急ぎに暇乞して来たばかりの高久君が駆けつけて来た。滞京中のお禮を云つてゐるうちに發車した。

幸にすいた車室があつた。加藤君と久し振の談話を交はしてゐると、程なく藤澤、其處で同君は下車して行つた。

一人になると急に疲勞が出て、うと／＼しながら午後二時、沼津驛に着いた。

今度の上京で一番面白さうであつたのは今年六歳

の眞木子^{まきこ}であつた。或る時、彼女は獨り高久君方の臺所に入つたまゝでなか／＼出て來ない。どうしたかへ行つて見ると、頻りに水道の栓をひねつては水を出してゐる。水道といふものを彼女は初めて見たのであつた。電話をも初めてかけた。エレヅエター、エスカレエター、すべて生れて初めてのもののみであつた。

おなじく二十一日

未明からまた例の腹痛とビイビイドンドンとが始つた。そしてずつと今日に及んで居る。(七月十日)

<p>大正十四年</p> <p>一月一日</p> <p>二月一日</p> <p>三月一日</p> <p>四月一日</p> <p>五月一日</p> <p>六月一日</p> <p>七月一日</p> <p>八月一日</p> <p>九月一日</p> <p>十月一日</p> <p>十一月一日</p> <p>十二月一日</p>	<p>大正十四年</p> <p>一月一日</p> <p>二月一日</p> <p>三月一日</p> <p>四月一日</p> <p>五月一日</p> <p>六月一日</p> <p>七月一日</p> <p>八月一日</p> <p>九月一日</p> <p>十月一日</p> <p>十一月一日</p> <p>十二月一日</p>
--	--

大正十四年

<p>大正十四年</p> <p>一月一日</p> <p>二月一日</p> <p>三月一日</p> <p>四月一日</p> <p>五月一日</p> <p>六月一日</p> <p>七月一日</p> <p>八月一日</p> <p>九月一日</p> <p>十月一日</p> <p>十一月一日</p> <p>十二月一日</p>	<p>大正十四年</p> <p>一月一日</p> <p>二月一日</p> <p>三月一日</p> <p>四月一日</p> <p>五月一日</p> <p>六月一日</p> <p>七月一日</p> <p>八月一日</p> <p>九月一日</p> <p>十月一日</p> <p>十一月一日</p> <p>十二月一日</p>
--	--

一月一日 晴
早曉起床、改服、一家敬禮。
八時頃、大悟法を伴ひ、金澤君を誘ひ、古奈舊本陣
に赴く。

一月二日 晴
正午、長倉、田中兩君來訪、五人にて飲む。
夕方、四人とも歸り去る。

一月三日 晴
一日寝つ起きつ。
疲勞甚し。

一月四日 晴
昨日と同じ。
桑畑の間を散歩す。

大正十五年(昭和元年)

二月十八日
朝(三時半より)「創作」二頁組の選、午後手紙、
夕方、のみながら「詩歌時代」の廣告文を考案す、

二月十九日 曇
大悟法君、「詩歌時代」廣告依頼のため上京、夜十二
時歸宅、午後三時達下愛河君來訪夜辭去、
朝廣告面作製、午後題附組選、
今日より晝酒を廢す、一大事業なり。

二月二十日 曇
朝、題附選、午後白旗君の遺稿(三月號掲載)を編
む、
夜、家族殆んど全部活動寫眞見物、
晝酒廢止勵行。

二月二十一日 曇
朝、「九州巡り」を書く。
晝前より、笹田、富士人をつれて活動寫眞に赴く、

「バグダッドの盜賊」なるものなり、
夕方、田中抱星君來訪、共食。

二月二十二日 曇、雨
朝、「九州巡り」の續稿、午後また然り。
時雨れて非常に寒し。

二月二十三日 半晴
『創作』の「九州巡り」を書き「眞砂」のために歌
數首を作る、
午後、「創作」の雜務、

「萬朝」に「詩歌時代」の廣告出づ、
夜また歌を作る、
終日、頭痛、

二月二十四日 快晴
朝、「創作社便」と「九州めぐり」をかく、
午後、用談の手紙、
夜、作歌、

長倉君來訪、

『東日』に「詩歌時代」の廣告出る。

二月二十五日 快晴
朝も、午後も、原稿依頼其他の手紙かき。
漁師、庭に來りて網をすく。
「創作」の校正、

二月二十六日 快晴
「詩歌時代」購讀勧誘のビラ書きに一日を費す、
門林兵治君朝、吉野榮藏君夜來訪、共に一泊、

二月二十七日 曇、雨
朝、ビラ書きと「婦人之友」の選。
午後、耕文社に行き、雜誌用の紙を定む。五千部に
て一冊十八錢にて作りあげること定む。
兩君、歸り去る。

風邪氣にて、鼻、咽喉痛し。
四斗樽着く。

二月二十八日 快晴

新雜誌の表紙とカットのことにて朝悉く頭を使ふ、
午後、手紙かき、萬朝選、
田中要吉、長倉、伊藤の諸君それ々に來訪、
箱根愛鷹、白雪なり、
珍しく濱に漁あり、

三月一日 半晴
第三號特別募集物を俳句と決定、鬼城、溫亭、一碧
樓にあて選者依頼の手紙をかく、
各欄投稿を締切り、選者宛送付す、
午後ビラ書き、歌二三首出來る、
みよのさん歸り來る、

三月二日 半晴
ビラ原稿作製、
正午、高山三千樹君來る、

朝鮮の福島勉君より鶴一羽送り来る、併句三選者より承諾の返電来る、

三月三日 晴

朝、ピラ書き、午後それを耕文社に持つて行く、たいたいたピラになりさうなり、

雑誌の表紙見本来る、

夕、初めて鶴を喰ふ、

鈴木秋灯君一日来て遊ぶ、

お節句にて富士人、姉に伴れられ小學校にゆく、

三月四日 曇

朝、各選者其他へ禮狀かき。

市川令次郎氏、永らく話してゆく、きけば松原の松

は伐られずとなり、大に安心す。

終日、頭痛み鼻汁出で、不快なりし。

夕方、長倉君来る、鶴をふるまはむとて招きたるなり。

三月五日 曇、極寒

「改造」に出す歌を、朝、清書す、

午後、ピラの校正出づ、よく出来たり、

東京の平塚君に頼みしカット遅れる様なれば伊藤彌

太君に頼むことにし、夕方、よびて一杯飲む、

寒く、風邪不快、

三月六日 曇、寒

午前午後、ピラの校正、夕方校了、

「静岡新報」「中國民報」の選。

夕方より郵便局々長代理根岸馬太郎、同電話主任田

中君來訪、一杯飲む。

子供、書生、活動ゆき。

三月七日 曇、寒

朝、不起、頭痛。

午後、「萬朝」「信毎」の選。

伊藤君、カットを持ち来る、よく出来たり。

夜、喜志、富士人、女中二人と活動にゆく、久し振

にチャップリンを見て面白かりし。

三月八日 半晴

朝、不起、

突然、河野クラ（猪狩殺の母）九年間音信不通なり

といふ殺の行衛を尋ねて来る、すゝめたれど泊らず、

歸りぬ、あはれなり。町に出で、白鳥、北原、島田、

窪田、四氏に椎茸を、野口、福永、島田、萩原、四

氏に干物を求め、小包にて送る。

三月九日

「少年クラブ」「主婦之友」の選。

各雑誌に出すべき廣告の原稿を作りにかゝる。

三月十日

廣告つくり。

午後作り終へて、村松中野兩君宛送る。

三月十一日

夕方、福永君来る、久し振にて懇談す、いよく細君を離縁せし由、みな氣の毒なり。

三月十二日 晴

朝より飲み、松原を歩き、湖月に到りまた飲む、高

山三千樹君をも呼びよす。

夜、村松君、静岡縣の歸りなりとて來り、泊る。

此處數日、ピラの發送にて家内中戦場の如し。

三月十三日 曇

福永、村松、晝の汽車にて歸京す、

勞れて何もせず、

三月十四日 雨

「詩歌時代」本欄に推薦すべき歌を選み始む、實に

劣作揃ひにて、頭大に痛む、終日それに費す。

三月十五日 晴

昨夜遅く中野秀郎君來り、泊り居れり、

昨日の續き選歌、
ピラ發送漸く終る、乃ち諸君を寄席にやつて慰勞す、
中野君、夕方歸る、

三月十六日

朝、漸く推薦の選を終へ、選評をかく、
午後、百圓懸賞もの、選にかゝる、

三月十七日 晴

昨日の續きの選、

午後、ふと思ひ立ちて、高山、笹田、上野の三人を
伴ひ鈴川にゆき地曳を引く、中漁、歸途、風烈し。

三月十八日 半晴

朝酒をよす、大英斷なり、但し、曉早く起きし場合
は自から別ならむ、

初號特別募集の歌を選む、
午後「婦人之友」の選、

夕、飲みながら、「詩歌時代」に出すべき歌の推敲と、
「わが庭、二字不明」首」の創作にかゝる、

三月十九日 半、寒

午前、自分の歌の添削、
午後、「金の星」の選、今度限りで同社と關係を斷つ
ことゝした、

ひよつこり宮坂古梁來、

朝、濱に出て鯛網を見、手づから數疋を拾ひ歸る、

三月二十日 雨、極寒

晝近く宮坂歸り去る、
午後、手紙七八本を書く、

近年になき寒さにて、愛鷹には裾野まで雪眞白なり、

有朋堂文庫を一時拂にて註文す、

三月二十一日 晴

「創作」一頁組の選、午前午後とも。

旅人、急にハシカを發す、明後日が入學試験とて狼
狽す、醫師を迎へて手當す、

三月二十二日 快晴

寒けれど、漸く春らしき日和なり、桃櫻少しづゝ開
けり、

題附組の選、

旅人、案外に軽く、この分ならば明日の試験大丈夫
ならむ、

三月二十三日 晴

旅人、心地よげに試験にゆく、

變な日で、終日、何もせず、

大會の事にて菊池檳榔子を訪ひたれど不在、

いよく春らしくなれり、

三月二十四日 晴

「創作」の「九州めぐりの追憶」を書く、

高山君、らつきようを植う、

旅人、試験好成绩なりし由、

警察の高等課より岩本利夫來る、
夕方、長崎より澤本直明君來り一泊、

三月二十五日

曉「九州めぐり」をかく。澤本君上京。

昨日より、書齋の前の布袋竹の下の草を抜く。

大會用事にて菊池君を訪ふ。
岬は四年の、まき子は一年の、免狀と二人とも學術
優等品行善正の褒狀を貰ひ來る。

三月二十六日 晴、寒
「九州めぐり」續稿、
旅人、中學入學許可の報來る、なほ、同人小學卒業式、

夕、長倉君、菊池君、大會準備相談にて來訪、一杯飲む、
畑の土ふるひ成就、下肥のタメ作り(セメント)にかゝる、

三月二十七日 晴、寒
「創作」の雜録書き。

畑の肥料溜出來上る。

朝鮮の福島勉君より獐の肉送り來る。

三月二十八日 晴

島木赤彦氏逝去すと。突然にて驚く。
鈴木秋灯君、櫻、椎、竹、竹柏等の植木を持つて來て呉れる。乃ち植ゑつけにかゝり、夕方、終る。

三月二十九日 晴
全くの春日和なり、桃殆んど満開。日向清武の大坪
廣江なる青年突如訪ね來る。

「創作」校了。
夜、高山、鈴木兩君に旅人、五九郎劇を見にゆく。
「詩歌時代」の申込 香ばしからず、心配なり。

三月三十日 晴

「詩歌時代」の第四號よりの特別募集の案を立つ、
夜、子供たちを連れ五九郎を見にゆく、

「創作」出來。

三月三十一日 晴

五九郎見物、狭い所に永く坐つてゐた罰か、センキ風の苦痛起り、午後に至つては息も出來ぬ苦しきなりし、
湯に入り、酒を少し澤山飲んで漸く抑ふるを得たり、

四月一日 晴
昨日より快けれど、なほ半病人なり、多く床中に過す、

大會の準備、何彼と心忙し、市川令次郎氏、古代石器を持ち來り社友に見せよとの事に、事務室に陳列す。

四月二日 晴
愈々、大會の前日、何彼と準備に忙しく、うろくと過す、
夕方、臨川閣に赴き、長倉菊池君等と打合せをなす、
夜、家に歸れば三四人の人既に來り居れり、

四月三日 雨

大會の當日といふに、生憎と雨天なり、會は盛會、豫定の如くに進む、
夜の宴會も珍しき氣持よき大會となりぬ、
婦人連だけ、社に來り泊る、

四月四日 半

田子の浦ゆきお流れ、臨川にて即詠會を開く、
午かけて少し晴れたれば、千本濱に出て、市川令次郎氏に頼んで網を引く、
二十人ばかり、社に來りて歸らず、徹夜なり、

四月五日 曇

正午ころ、誰よりとなく引きあげゆきぬ、
綿引君來る、

四月六日 曇

旅人の入學式にて、午後一時中學へゆく、

四月七日
大會の疲勞出で、この數日、何をなすともなく、うつくとすごす、

四月十一日 晴

「詩歌時代」の納本だけ出來上る、先づ上出來なり、耕文社にゆき、郵便局に行き、第三種の認可手續をなす、

歸りに山王さまの櫻を見る、

四月十二日 晴

坂口藤佐市君突然來訪、晝すぎまで話してゆく、

「主婦之友」「萬朝」の選、

四月十三日 晴

午後、川口まで散歩す、これより毎半日、きめて散歩せむとおもふ、

四月十四日 晴

「詩歌時代」購讀者宛の葉書文面を稿す、カットをたのみに伊藤彌太君を訪ひ、終つて町に出で晝食す、

ゴム底足袋をかひ來り、草とりをなす、今後風なくば散歩、風あればこの草とりを毎日午後試みむとす、

四月十五日 晴

「詩歌時代」の新聞廣告文案。

菊池檳榔子君來訪。

四月十六日 晴

朝、大悟法、運動見物と「詩歌時代」販賣の用にて上京す、

午後畑いぢり。

四月十七日 晴

「中學世界」選、

東京の大賣捌に出す雜誌部數につき大悟法と電報にて打合せつゝ、煩悶す。

四月十八日 曇、少雨

「萬朝」「九州日々」の選、

木槿を植ゑかへ、たうもろこしの床をつくる、

雨降らむとして降らず、頭重し、

四月十九日 晴

「隨筆」のために、「家のめぐり」の小品を書く、床屋にゆく、

「詩歌時代」の讀者に出す葉書校了、

四月二十日 晴、風

昨夜十一時、大悟法歸り來る、

正午近く、中村政雄君來訪、一泊、

四月二十一日 晴

「創作」一頁組を見始む、

中村君辭去、上京、

昨夜、思ひがけぬ暴風にて、畑の垣、倒る、

四月二十二日 晴

意外の寒さなり、

一頁組の選を終り、大會記を書き始む、

松原に入り、穂の芽をつむ、

四月二十三日 晴

大會記、書きづらし、

四月二十四日 小雨

大會記をかきあぐ、
珍しく雨降る、

詩話會の、白鳥、室生、萩原、千家、佐藤、福田、
百田の八君が下田からやつて來るといふので二度も
船着場に迎ひに出たれど終に來らず、
鈴木秋灯君來る、

四月二十五日 曇
題附組を見始む、

篠原一太郎(社友)東京より來訪、すぐ歸る、

詩話會の連中を心待せしもまた來らず、

「萬朝」選、

四月二十六日 晴
題附組、終る、

早大出版部の山田謙吉、作法原稿の催促に來る、ま
た、東京の佐々木秀光といふも、
夕方、長倉君來訪、犬の仔をつれて行つてもらふ、

「婦人之友」のを見始む、

四月二十七日 晴

「婦人之友」「東日」の選、

「詩歌時代」全部製本出來、郵送(三千百二十四部)
も大賣捌分も發送を終る、

千葉、齋藤亮之君寄贈のたうもろこしを植う、

四月二十八日 曇

「婦人之友」の選終る、

午後、創作社便を書く、

「萬朝」の選、

五月四日 曇

床屋にゆく、

「少年クラブ」の選、

植木屋、柚と橙の見ごとなるを持ち來り植う、

五月五日 曇

「詩歌時代」の選歌に専心す、

上野君の母來る、

蜜柑に肥料をやる、

旅人遠足にて修善寺にゆく、

五月六日 晴

「詩歌時代」の廣告、二三の新聞に見ゆ、

降る如くして降らず、等しく雨を待つ、

四月三十日

夕方、古泉千樫君來る、

五月一日 晴

古泉君を案内して三津まで船、古奈にて晝食、湯ヶ
島に到り一泊す、
若葉甚だよし、

五月二日 晴

三島高等女學校に穂積君を訪ひ、共に沼津に來り、
晝食す、
古泉君、歸京、

五月三日 晴

二三日の飲み勞れ、身體にあり、

選、昨日の續きを終り、選評を書く、

松原に煙らふ若葉、若葉の間に啼き交す鳥の音、終日散歩してゐたし、

上野君の母歸る、

來ると云ひし中野秀郎來らず、

五月七日 雨

早曉、雨聲あり、こは珍しと喜びをるうち、本降りとなりて終日續く、農夫の喜び思ふべし、

早稲田の文學講義に短歌作法を書くべく受合ひ大に難儀、けふこのため悉く頭を痛む、夕方、中野君、病弟を伴ひて來る、

五月八日、晴

講義録を書き繼ぐ、

中野君の弟、附近に下宿、

夕方、旅順の社友島崎元枝女來る、

全くの若葉日和なり、

五月九日 晴

講義録四十三枚をかく、

「萬朝」の選、

夕方ダリアを植ゑつゝ、あれば服部純雄氏突然來訪、

夏めきて暑し、

五月十日 晴

「信濃の高原」の腹案を作りしのみ、何もせず、

植木二三に肥料をやる、

五月十一日 晴後雨

「信濃の高原」を書き始む、

午後、雨、快し、

有朋堂文庫の第一回配本來る、

五月十二日 半

朝、「信濃の高原」を書き終る、

「中學世界」「主婦之友」の選、

長倉君方よりトマトの苗を持ち來る、乃ち植う、

五月十三日 曇

朝、「週刊朝日」のため西瓜の歌を作り始む、午前の散歩の間、珍しく歌出來る、二十首も出來たらむか、

公園の濱の網に鯖、舟二艘分もとれる、夕方、服部さん、その母叔母など三四人を伴ひ來訪、すぐ歸る、

實に氣まぐれの寒さなり、

五月十四日 半晴

詩歌時代の編輯だよりを書く、

西瓜の歌を推敲し、投函す、

五月十五日 半晴

「中國民報」「九州日々」の選、

奈良の高垣君よりカンナ、グラヂオラスの球を送り來る、カンナを植う、

まだ氣まぐれの寒さなり、

夜、高山三千樹來る、

五月十六日 半晴

詩歌時代のうめくさ書き、

「萬朝」の選、

高山君歸國す、

グラヂオラスを植う、

五月十七日 晴

「詩歌時代」の豫算其他にて苦心す、

午前、耕文社にゆき右の相談をなす、

午後、同第二號分葉書ビラの文案、

五月十八日 晴

葉書ビラを書きあぐ、なか／＼苦勞なことなり、

晝すぎ床屋にて服部さんと出會ひ、魚磯にて一杯飲

む、

五月十九日 晴

朝、服部さん東京亭より來訪、共に片濱の松原を散歩す、

五月二十日 半晴

葉書ビラの校正、「婦人之友」の選、

約東郵便の擔保に二百圓、西川大工に百五十圓支拂ひ、葉書三千枚を買ふ、

詩歌時代の資金、愈々缺乏、ために頭を痛めて終日何もせず、

五月二十一日 雨

何彼と雜務、忙し、

「婦人之友」の選、

「詩歌時代」納本だけ製本出來、早速納本す、

五月二十二日 半

「創作」一頁組を見る、

「婦人之友」選了送附、

「詩歌時代」第三種認可の報中野君より打電し來る。

夜、小さんがかゝつてるといふので出かけようとしたが、身體氣になり中止す、若い人たちだけ行かす、

五月二十三日 曇

「創作」一頁組の選、

松原の中の道を原町まで歩き、驛前にて晝食して歸る、

「萬朝」の選、

五月二十四日 曇

「創作」題附組の選、

長倉豊太郎氏方より贈られし蜜柑二本を植う、

五月二十五日 半

曉起、雨聲甚だよし、遠く雷鳴を帶ぶ、

題附組を見終る、

安田生命保險の診察醫來る、合格、

五月二十六日 晴

「酒の歌」濱」の歌を推敲してなか／＼成らず、

延岡の人、鹽月君といふが來訪、

雞小舎を造る、

稿料代りの干物出来る、

五月二十七日 晴

「酒」の歌の推敲、午後「濱」の歌を同じく、

「讀賣」の選、

夕方、田中君を招き、茶菓見の宴を催す、

芦川、八田、來訪、

五月二十八日 曇

「濱」の歌を推敲、「アルスグラフ」に送る、

曇、重くして何も出來ず、

アルスより歌集出版の交渉來る、三年目故、出して
もよしとおもふ、

五月二十九日 半

意外に多くいつ作るとなく作つてゐた歌を集めて推
敲、「改造」に送る、

新潮社より牧水集印紙五百來る、

午後、創作社便書き、

旅人、三津に雨中遠足、

田中君よりトマト苗を貰ひ植う（昨日）

五月三十日 強雨

やみまなしの雨であつた、

「創作社便」其他雜稿、午後隨筆「たぐもの木」を
書き始む、

八木君よりダリヤ、カンナ、百日草其他の苗を一箱
送り來る、

五月三十一日 半

「たぐもの木」脱稿、「不同調」に送る、八木君よ
りのダリヤ、カンナを植う、三時間かゝる、

ダリヤ植糸が過ぎたか、午後何もようせず、

夜九時半、三苦京子來る、

六月一日 曇

京子さんを案内して、御成橋より舟、多比上陸、歩
いて長岡温泉に到り、夕方歸る、

六月二日 晴

何もせぬ日なりき、

夕方内藤銀策君來り、夕食を共にし、やがて辭去、

濱に正覺坊あがる、

「創作」納本だけ出来る、

六月三日 晴

「詩歌」第四號原稿依頼狀の文案をかく、

「少年クラブ」の選、

夕方、中野君弟の宿のことにて來る、いろいろ氣の
毒なり、

六月四日 晴

中野君、弟をつれて歸京、

「中國民報」の選、

トマト、茄子に肥料をやる、

六月五日 曇、寒

大悟法君、下田を廻つて天城を越すといふので、朝早く起きて見送る、

京子さんも十二時の汽車で西下、驛に見送る、

床屋にゆく、

「詩歌」第四號原稿依頼状をかく、

六月六日 曇、寒

隨筆「鴉と正覺坊」を書く、

横濱の近藤一朗君、朝六時頃來訪、暫くして歸る、昨夜東京亭に來てゐたとのこと、

法外の寒さなり、

六月七日 晴

「鴉と正覺坊」を書き終へ、「文藝春秋」に送る、

手紙五六通を書く、

午後、鈴木秋灯君來訪、

ハス芋にんにくを植ゑ、玉蜀の草とり、

大悟法、夕方ひよつこり歸り來る、

六月八日 晴

「萬朝」「富山日報」の選、

午後、長倉君來訪、借金の返済法につき話す、同君は御厨銀行が伊豆銀行と合併するにつき、辭任する由、

信州西條梅子さんより蕨送り來る、

六月九日 晴

「詩歌時代」に出す歌を推敲清書す、

喜志、富士人を伴れ、喜利の見舞に上京す、

「國民」「中學世界」の選、

六月十日 晴、暑

「詩歌時代」の選歌に専念、

六月十一日 晴、暑し

「詩歌時代」の選、

『新政』に歌「竹露集」を送る、

「主婦之友」の選、

べらぼうに暑し、明治十九年來のレコードなりとか、新聞にあり、

「詩歌」の廣告文案、

六月十二日 晴、驟雨

「詩歌時代」の歌の評を書く、

同第四號俳句號の廣告ビラ葉書の文案、

「國民」「枯野」の選、

夕方、雨、遠く雷鳴る、

六月十三日 雨、寒し

べらぼうな冷え様なり、

「早稻田大學講義録」短歌作法を書く、

夕方、喜志東京より歸り來る、

六月十四日 雨

停電にて朝の爲事出來ず、

短歌作法の續きを少し、

「萬朝」「國民」「信毎」の選、

内川來り、窪田氏依頼の借家の事を話してゆく、

六月十五日 晴

昨夜また停電、

「時代」三ヶ月分申込のあとを繼がすべく手紙の文案をかく、

原稿依頼催促書き、

「信毎」の選、梅雨晴、

猫の子を買ひ來る、

六月十六日

「時代」の編輯便其他雜録、

頭痛み、苦勞す、

「短歌作法」を少し、

六月十七日 晴

「短歌作法」辛うじて廿二枚を書き、送る、

「東日」の選、

夕方、驟雨

六月十八日 晴

「創作」一頁組の選、

「東日」の選、

歌數首を作る、

六月十九日 曇

「創作」題附組の選、

床屋にゆく、

明日より旅行せむとしたれど、もう一日延ばす、

六月二十日 晴

「婦人之友」「讀賣」の選、

「創作」の添削實例を書く、

六月二十一日 晴

朝六時發の汽車にて出發、車中眠りつ覺めつしながら新居町驛下車、其處より船出です、自動車にて鷺津に廻り、正午出帆、館山寺に立寄り、夕方氣賀町着、吉野榮藏君を訪ひ、とめられて泊る、

六月二十二日 晴

吉野君と共に奥山半僧坊に詣で、其處より陣座峠を越え、黄楊野村を過ぎ、吉川峠を越え、新城町に到り、金澤君を訪ふ、吉野君は學校の都合ありとて歸り去る、

六月二十三日 曇

午後、獨りにて鳳來寺山麓門谷村に到り、小松屋に泊る、

夜、佛法僧、頻りに啼く、

六月二十四日 晴

朝、洗面所にて聲かくる人あり、八高の竹中皆二君なり、共に山に登る、田畑賢修君と尼さんとに逢ふ、湯谷温泉に一泊せむとてゆく、ひどくこみさうなり、乃ち終點川合驛までゆき二木屋といふに泊る、豊川の上流なり、百間瀧等を見る、

六月二十五日 晴
新城町に金修君を訪ひ、豊橋にて竹中君と別れ、夜十時半歸沼す、

六月二十六日 晴
疲勞出で、留守中の新聞讀み、

六月二十七日 晴
おなじく、留守中の郵便物讀み、

六月二十八日 晴、夕雨
創作社六月便を書く、

六月二十九日 曇
「國民」「中國民報」の選、

六月三十日 半晴
朝早く中西悟堂君來り夕方歸京、共に一日話す、

「創作」七月號出來、

七月一日 晴
梅雨晴のよき日和なるに、何やら頭重し、

「静岡新報」「少年俱樂部」の選、

七月二日 晴
「梅雨紀行」を書き始む、

肩凝り、氣重し、

七月三日 晴
いよゝ夏の照りなり、

「梅雨紀行」のつゞき、

肩の凝り、いよゝ痛む、

七月四日 晴後雨

「梅雨紀行」(二十八枚)を書き終る、

夕方、時化の如き風雨なり、

社會主義者山崎某、死刑囚中濱哲の遺稿出版費を出せとて來る、話面白く、十圓出す、

家内たち、露人、ボリスラツシユのグアイオリンきゝにゆく、

七月五日 曇

「萬朝」の選、

「梅雨紀行」氣に入らず、筆を入れかけて、そのまゝ、「新潮」に送る、なぜ、もう少しおちついて書けぬかとおもふ、

氣重し、

「詩歌時代」の心配よりか、肩のこり、中々とけず、

七月六日 晴

「改造」八月號に出す歌の推敲を試む、

「九州日日」の選、

七月七日 曇

「改造」への歌推敲、後、送る、

「九州日日」「東京日日」の選、

耕文社より中元來る、

七月八日 晴

「詩歌時代」を廢刊すべきか否かにつき、大に頭を悩ます、

折も折、東京の賣上金來る、かれこれ差引き一百圓也、

熊本者なりといふ陽狂、錢貰ひ来る、ろくな日でない、二圓やる、

「東日」の選、

七月九日 晴

廢刊か否かにて、また終日苦惱す、

「中學世界」「讀賣」の選、

トシヲテルヲ兩人大蝸を釣り来る、

七月十日 晴

大體廢刊にきめ、來てゐる分の誌代に相當するだけ刊行すべしとて、第四號分原稿其他の事にて耕文社に行く、これにて心や、風ぐ、床屋に寄る、

「萬朝」「主婦之友」の選、

大悟法、矢張り雜誌の用事にて上京す、

七月十一日 晴

廢刊の事にきめて、心軽くなりぬ、

「主婦之友」「信毎」の選、

田中君、遊びに来る、

夜、大悟法歸る、

七月十二日 半

「信毎」「國民」「枯野」の選、

蒸す日にて氣分わるし、

七月十三日 曇

風ありて暑し、

「詩歌時代」の歌の選、

七月十四日 晴

「詩歌時代」の選と評、

初めて海に入る、よき氣持なり、

七月十五日 晴

けふも海、大丈夫なり、

あと忘れたり、「中民」の選、

七月十六日 晴

大阪の大島君たちが來るといふので、朝七時、停車場に迎ひにゆく、來らず、實は來てゐたのだが一汽車時間の間違ひなりしこと分明す、

「東日」「萬朝」の選、

七月十七日 晴

夕方、大島君と野崎君と富士登山を終りて來訪、一飲して夜十一時の汽車にて歸る、

同じく夕方、東京若竹會の篠原一太郎、田中佳水、水野國太郎君三人來り一泊、

百合咲く、

七月十八日 晴

カンナ開く、

東京の連中、午後歸る、

「萬朝」の選、

家人、活動見物、

七月十九日 晴

この頃、何といふことなく氣鬱して萬事面白からず、爲事も手につかず、

「北海タイムス」の選、

夜、圓生、圓藏の落語き、に妻と二人してゆく、

七月二十日 晴

土用の入りといふ、實に烈しき暑さなり、

昨夜の寄席行がたゞり、また肩凝り齒痛む、

七月二十一日 晴

昨日に劣らぬ極熱、沼津に来て初めて感ずる思ひがした、

肩凝り齒痛む、

七月二十二日 曇、少雨

やゝ、しのぎよし、

齒醫者にゆく、一寸一本だけ直して貰ふつもりが、急に口中四枚の齒を直すことになる、

床屋にゆく、

七月二十三日 晴

齒醫者へ二度、

鈴木君より蕨の終り初物を貰ふ、美味云はんかたなし、

七月二十四日 晴

また暑し、

齒醫者通ひ毎日、

夜、津島りせ(晁禮子)来る、

七月二十五日 晴

左奥齒、入齒成る、具合よろしからず、

正午、服部純雄、少し経て長倉君、來訪、

七月二十六日 晴、夕方小雨

「創作」の題附組を見る、

津島さん、歸京、

七月二十七日 曇

「創作」の選、

昨、夜半より喜志腹痛を起し苦しむ、

夕方、鈴木君トマトと母の苗を持って来てくれる、

七月二十八日 晴

「婦人之友」「創作」の選、

何といふことなく、心ぼそくていけず、

七月二十九日 晴、夜雨

「創作社七月便」を書き「創作」八月號の編輯を終る、

晝すぎ、尾山篤二郎君來訪、夜まで話してゆく、

七月三十日 晴

「國民」の選、

正午山崎斌君來り、夕方入交總一郎君來る、山崎一泊、

七月三十一日 晴

朝、廣島より山隅衛、上州より吉田まもる來る、山隅君晝近くまで話してゆく、

「東日」の選、

夜、書生たち活動見、

八月一日 晴

暑さ、愈々甚し、齒痛以來やめてゐた泳ぎにゆく、

「萬朝」「讀賣」「静岡新」の選、

八月二日 晴

朝六時の汽車にて旅人、岬子、大悟法に伴はれて富士登山に赴く、

愈々今秋北海道半折行脚の腹をきめ、千田、谷口、山下君たちに手紙を出す、

「東日」の選、

昨日今日四十二年目の暑さなりとぞ、

八月三日 晴

「少年クラブ」「静民」「信毎」「中世」の選、

相變らずの暑さなり、

夕方、富士より大元氣にて三人歸り來る、

八月四日 晴

朝、四五通の手紙書き、

終日、「東日」の選、漸く七月中旬迄の分を見終る、

雨氣つきたれど、晴、庭木枯れむとす、

右の下齒を抜く、

八月五日 晴

「國民」の選、

夕方、綿引君來る、

八月六日 曇

夜半二時三十分、颯爽たる雨を聞く、惜しい哉朝かけて曇となる、

正午、服部純雄、眞木要兩君來訪、綿引君滞在、

八月七日 晴

朝、半折會用手紙書き、

「主婦之友」の選、

「詩歌時代」を十月號迄出すことに決定、

八月八日 晴

夜、狩野川の川開きにて花火あがる、

眞木子、おなかをこはす、

八月九日 晴

「萬朝」の選、

綿引君辭去、

夜、築地小劇場の芝居國技館に開演、小生のみ残りてみな大人ゆく、

八月十日 晴

「東日」の選、溜つてゐてなか／＼追ひつかず、

眞木子なほ不快、

八月十一日 晴

沼津日々新聞に寄すべく、「沼津千木松原」を書く、松原伐截の反對論なり、ために記者來りなどして一日を費す、

八月十二日

夜も暑く、眠り難し、十一時に眼さめて、あと駄目、

終日、何もなしがたし、
夕方、細野春翠君来る、

八月十三日 晴
朝、手紙書き、

暑くて何も出来ず、水泳二度、

午後一時半、地震あり、

八月十四日 晴

笹田富三君、愈々歸國することになる、夜、驛前松
風軒にて送別會、

細野君も驛前山本館に泊り夜中の汽車にて歸ること
になる、

八月十五日 晴

待ち暮せども雨降らず、

正午、田中、鈴木兩君相次いで來訪、

海嘯めきたる浪の寄せ様であつた、

八月十六日 晴
午前、床屋にゆく、

「萬朝」の選、

神原君、來るかとして待ちぼけ、

夕立らしい空模様になつたが駄目、鈴木君また來る、

八月十七日 雨

朝來、催し居りし雨、午後に至り本降りとなる、快
哉、

「詩歌時代」の選、終る、

神原君また待ちぼけ、

八月十八日 曇

降りさうで降らず、

「北海タイムス」「静岡新報」の選、

神原君、漸く來る、北海道の話、はずむ、

八月十九日 曇

夜半二時ごろ、豪雨降る、

朝手紙かき、

神原君に子供たちを連れ、原町の鰻屋に晝飯たべに
ゆく、

夕方、東京の横山君、甲斐の平賀君を伴ひ來る、同
君は南アルプス通なり、

八月二十日 晴

秋が急に來た様、法師蟬が庭の木に鳴く、

北海道あての手紙かき、

八月二十一日 晴

朝五時の汽車にて神原君歸る、

どうしたものか、終日、氣持悪し、

夕方、山浦貫一君一寸立寄つて歸京す、土肥の歸途
なり、

「詩歌時代」編輯便かき、

八月二十二日 曇

「創作」「萬朝」の選、

萬朝報の石井迷花といふ人來る、

雞舎を作る、

八月二十三日 曇

例の曇の病か、胃腸わるきか、終日氣色わるし、飲食不振、

何もせず、ねころびすごす、

夜、家内大勢曲馬見にゆく、

八月二十四日 晴

わが誕生日とて、朝赤飯、夕方ごもくめし、

題附組の選を終る、

午後、服部氏夫妻來訪、

「國民」の選、

八月二十五日 曇、夕雨

「東日」「婦人之友」及び「創作」一頁組の選、

「詩歌時代」九月號出來、愈々廢刊とおもふに、未練甚だ深し、

八月二十六日 晴

「枯野」「富山日報」「中民」の選、

夕方、鈴木君、たうもろこしときんし瓜とを持って來てくれる、一泊、

杉山甚七の世話にて少女まさ來る、

八月二十七日 晴

一頁組の選、終る、

手紙三四本、

鈴木君昨夜一泊、今夕歸る、

また、暑し、

八月二十八日 晴

また、暑し、

「批評と添削」「創作社便」をかく、

夕方、長崎の社友西川君立寄り、夕食して出立、

明日の遠足に子供たち大うかれ、

八月二十九日 晴

旅人、岬子、眞木子、恵をつれ、裾野まで汽車、其

處より鈴木君兄妹加はり、ぶらくと歩いて御殿場までゆく、蟬の聲、稻の露、路傍の秋草、溪の姿、久しぶりにいゝ氣持になつた、夕方、四時歸宅、

八月三十日 曇

いくちなさよ、昨日のつかれか、何も出來ず、

「萬朝」の選、

八月三十一日 晴

半折會用手紙(天野、遊佐、福地、菊池)かき、北海道社友に出す手紙の文案、割に氣持よく爲事できたり、

泳ぎにゆく、

みよのさん、引越し、

九月一日 晴
札幌より初めて半折會用の手紙来る、十八日講演會を開くといふ、迷惑なり、電報にて問合せ、

床屋に行く、耕文社にゆく、

九月二日 晴

半折會用手紙かきが主な用事なりし、

札幌より返電来る、廿五日に日延ときまる、やゝ安心、

眞木子の耳病、はかしくしからず、

九月三日 雨

朝、快雨、夕方また雷雨、

昨日と同じ手紙書き、

「少年俱樂部」の選、

長倉君來訪、銀行をやめられし由、

九月四日 時化

また手紙かき、ことにけふは社友宛の依頼狀の印刷成りたればそれを發送す、

午前十時ごろより大時化となる、濱の浪の大いなる、初めて見るところなり、松原の松の枝折れ落ちたる多し、

九月五日 晴

眞木子を連れ、醫者(廣瀬)にゆく、

北狩野村の西島はつねさん来る、

「萬朝」の選、

九月六日 晴

「時事」のために「沼津千本松原」を書く、

札幌、千田君より來書、大分前景氣さかんの様なり、

手紙かき二三通、

朝三時、大悟法君上京、

九月七日 雨、晴

「沼津千本松原」を書きあげて送る、

鐵道省の「旅行案内」を買ひ來り、昨日届きし「北海道詳圖」と引合せて見且つ楽しむ、

晝頃、鈴木君來る、

九月八日 曇

昨夜、寢苦しく眠りそこなひ、晝は重き曇にて、殆んど何もせず、

「東日」の選、手紙二三本、

九月九日 曇

「詩歌時代」最後の廣告文案、

手紙かき、何もせず、例の重たき曇なり、

夜、大悟法君歸り來る、

九月十日 半

昨夜、眠りそこなひ、酒追加、今日二日酔、

菊池、田中の二記者來り、千本松原伐採反對の演說會を開く故出席せよといふ、出ることにする、

床屋にゆく、

九月十一日 曇

早大文科講義の「短歌作法」を書かむとして能はず、

夕方、國技館に赴く、千本松原伐採反對の演説を試みむとてなり、大入りにて眞面目なりき、場内にて服部さんに會ふ、

十二時歸れば、中野君來てゐたり、

九月十二日 晴

服部さん、朝、上京、

朝、眠りそこねて、終日何も出來ず、

「中學世界」の選、

朝日記者熊澤利吉君來る、

九月十三日 曇

池之端、心正堂へ揮毫材料註文書を作り、中野君にことつける、

中野君九時出立歸京、

「萬朝」の選、

九月十四日 曇

朝、時計を見違へ、十二時より起き、短歌作法を書かむとして、殆んど書かず、乃ちやめて、「國民」の選をなす、

晝頃より齒痛む、肩の凝りにや、

九月十五日 晴

昨夜々中より齒痛みて眠れず、苦しむ、朝、見れば痛める左の頬腫れ上りたり、

北海道の手紙かき、

九月十六日 曇

「短歌作法」を書く、大苦痛なり、

肩凝り齒痛む、

北海道への手紙かき、

九月十七日 雨

や、元氣よく「作法」をかき終り、送る、

夕方かけて時化降りとなる、快し、

や、飲みすぎ、

俄かに冷し、寒し、セル、

九月十八日 晴

「創作」一頁組をみ終る、

出立近づき、忙しく、また活氣つく、

東方寺さん來る、千本松原伐採反對の陳情書を農林

大臣宛出すための署名求めなり、

九月十九日 晴

朝、講演の準備、

午前、揮毫、午後「婦人之友」

田中君來る、

心持戦場なり、

九月二十日 晴

朝、講演準備、

午前、高鹽君の歌集の序文書き、

午後、床屋ゆき、

やれ忙しやく、おまけに「詩歌」約束郵便保證金

の受取を探すとて頭を痛ましめぬ、

九月二十一日 晴

今曉四時乗車、北海道に向ふ、該旅行記を以て日記に代ふるものなり、

十二月六日

今夜、北海道の旅より歸る、七十七日目なり、

加藤東籬君來り、二三日前より待つてあたり、

十二月九日

加藤東籬君歸る、

十二月十一日

昨夜十一時より今曉五時にかけて、沼津市の大半焼失す、耕文社、稻玉醫院、共に全焼、

十二月十五日 寒雨

「創作」一頁組を見始む、

夕方、山本茂三郎氏來り、顔を合はすや涙を流して金澤修二君のことを語る、共に大に飲み、別る、

火事見舞の禮狀を出す、

十二月十六日 曇

「創作」一頁組の大半を見終る、新年號は四五十頁のものにして、やはり耕文社より出すことにきめた、今度耕文社ポイントに改むる由にて活字の見本を持ち來り意見を求む、

「タイムス」の選、

鈴木君より貰ひし山茶花を植う、

北海道へ禮狀出す、

十二月十七日 曇

また一頁組の選、これにて終り、

火事見舞の來狀意外に多く先日三百枚を出し盡し

今日また二百枚を註文す、

「タイムス」の選を續ける、

十二月十八日 晴

「北海道行脚日記」をかき始む、

「中國新聞」「大分新聞」の選、

聖上、愈々御危篤の由、

十二月十九日 快晴

「タイムス」「鹿兒島朝日」「馬關毎日」各紙の新年號もの、「萬朝」平常のもの、選をなす、

實によき冬日和、朝も、ことに夕方の満潮、満月、

愛鷹山の野燒、

鈴木君より椎の實を貰ふ、

十二月二十日 曇

「行脚記」を書き終る、三頁分なり、

午後、各新聞新年號への揮毫をなす、

朝、椎を炒りながら歌數首を作る、

十二月二十一日 曇

「福日」「朝鮮新聞」「富山日報」「大牟田毎日」の選、

風邪氣味にて頭と咽喉とに鈍痛あり、

庭木の歌三四首を作る、

左官屋來る、

十二月二十二日 晴

「九州日日」「大阪時事」「静岡新報」の新年號もの、

十二月二十三日 晴

朝、「創作社便」二頁分をかく、

午後「いばらき」「萬朝」新年もの、選、

熊本、黒木彌吉君より干柿、木造町、市田とよ女よりくるみ、送り来る、

文房堂より原稿紙一千枚来る、

十二月二十四日 快晴

朝、眠りそこなひ、爲事出来ず、僅かに一日が、り
で「婦人之友」を選したのみ、

夕方、竹添履信君、細君と赤ちやんと共に來訪、暫
くの時間なりしも楽しく話す、六時半の汽車にて小
田原に歸る、

十二月二十五日、快晴

終に御崩御、今曉一時廿五分なりしとぞ、

一日をたゞ慎みて送る、

「北海タイムス」のために「北海道雜觀」を書き始む、

出口直日より菓子包を、田中抱星君より鮭を貰ふ、
眞木、風邪就床、

十二月二十六日 快晴

御崩御を悲しむ歌七首を作る、

「北海タイムス」ものを書き終る、意外に長きもの
なる、

幾春別の山口君より鮭来る、

十二月二十七日 晴

自作歌の添削に従ひ「國民」「時事」に各十二首づ、
を送る、

夜、大工福さん來り、茶の間のあろりの下拵へをな
す、

片濱信用組合の利子、十二月迄の百四十九圓八十錢、
長倉君に渡す、

十二月二十八日 曇

自作添削、「婦人之友」「苦樂」に送る、

午後、手紙かき、

雪もよひの寒き日、

帯廣進藤さんより巨大なる鮭来る、廣島山隅衛君よ
り名物の漬物、

十二月二十九日 快晴

「大毎」へ、「自分を語る」を書き、「苦樂」(五首追加)
「美術新論」の歌を作る、

午前十一時、旅人富士人を伴ひ床屋にゆき粹多樓に
て晝食、歸途鬪球盤を買ふ、

「創作」新年號出來、

手紙、四五通を書く、

十二月三十日 曇、晴

歌數首を作り、且つ添削、

齋藤茂吉君より越前君愈々重症の報来る、

手紙二三通書く、

餅搗きをなす、今年は田舎風にまろめたり、
大悟法、振替の事、齋藤君訪問のため急に上京す、

十二月三十一日 雨、晴

曉、二時より六時まで歌二十數首を作る、「東日」
に十首送る、

柴山武矩の歌集序文を書く、
年の瀬らしき苦勞をなす、この數日來のことなり、
靜かに賑かなるお年とり、

大正十五、昭和元年、わが大厄四十二歳いよく、今
日を以て終る、

昭和二年

一月一日 晴

例の如く曉起、歌十四首を作る、「國民」に「庭の冬」出づ、「大分」「静岡」の選歌發表を見る、

六時、衣を改め、家内挨拶、屠蘇を祝ふ、

諒闇とて、行かず來らず、静けくも寂しい元日であつた、

朝、松原中の大山祇さまに參る、途中の森の木々、ひどく瑞々しく見えた、午後、松原散歩、風ありて公園にも人あらず、

富士人、風邪氣にて發熱、三十九度に昇る、

夕方、東京より柳瀬留治君來訪、一泊、

大悟法君、昨夜遅く、東京より歸り來る、越前君小康の由、

一月二日 晴、暖

朝、三時より六時の間に歌五十餘首を作る、よくもまづくも近來になきことなり、

柳瀬君十一時辭去、入り替りに田中要吉、田中耕文社若主人、肴屋の息子、來訪、夕方櫻井女、

書間は終日遊びたり、

富士人、様子よからず、稻玉さんに來て診て貰ふ、正月を一番楽しんでゐたに可哀相なり、

アルスより歳暮とて見ごとのノート送り來る、

(發信) 金澤喜八郎(味噌) 平野行彦、

一月三日 晴、暖

昨、一日作つた六七十首を清書添削し、新たに十首を作る、

夜、珍しくはなを引く。

何やら氣色のわるい日であつた。

「少年俱樂部」の選。

(發信) 「女性」「苦樂」、「少年クラブ」

一月五日 快晴、暖

朝と午後と「少年世界」の少年ものを書きかけて失敗す、

午前、「東京日日」の選、

夕方、稻玉氏來診、富士人、具合よし、小生も心臓を診て貰ふ、故障なき由、なほ明朝検尿して貰ふことにする、これで温泉行が出来るわけなり、

實によき日和なり、箱根山の冬霞、富士の雪、

一月四日 晴、暖

例の如く曉起、歌十四首を作る、「國民」に「庭の冬」出づ、「大分」「静岡」の選歌發表を見る、

六時、衣を改め、家内挨拶、屠蘇を祝ふ、

諒闇とて、行かず來らず、静けくも寂しい元日であつた、

朝、松原中の大山祇さまに參る、途中の森の木々、ひどく瑞々しく見えた、午後、松原散歩、風ありて公園にも人あらず、

富士人、風邪氣にて發熱、三十九度に昇る、

夕方、東京より柳瀬留治君來訪、一泊、

大悟法君、昨夜遅く、東京より歸り來る、越前君小康の由、

鈴木秋灯君、來り泊る、夕方、田中要吉君に自家の大悟法上野君と長倉君方にゆき、馳走になる、庭美しく出來るあたり、

その出がけに、岡田純次郎、前田省三、市川徳次の三氏來訪ありしも、上にようあげざりき、

富士人、急に元氣出で、安心す、夕方三十八度二分、

(發信) 佐久間(ニドメ) 信吉、「萬朝」

一月四日 晴、暖
舊作添削、新作十首。

櫻井女來訪、夕方鈴木君と辭去。

眞木子、離れの爐を跳び越え、鐵瓶を引つくりかへす。

富士人、はかどくしからず。

今日、晝酒をよして見る、續けば幸なり、續かせむとおもふ、

(發信) 「東日」「時事」

一月六日 晴、暖

「少年世界」に「金比羅参り」を書く、晝までかゝる、

午後、「大分」の選、

晝酒、よす、

中村君よりこまゝとの手紙あり、二月初めに來る由、

(發信) 中村終花、

一月七日 曇、夕方より雨、

越前君への見舞金勸誘の文案を作る、

今朝、七草粥なり、美味し、

添削しつゝ、數首を作る、浮れて作った作をあとから見て驚く事は屢々だが、今朝も手痛くそれを感じた、「竹の影」の歌に就いて、

和田徳太郎「百人一首と戀愛」の序文 鈴木亮一郎 (濱松の舊社友) 來訪、

夕方、長倉田中兩君を招き七草正月をなす、よせなべ、五日、うまし、食後、家内中して花をひく、

富士人、よろし、小生の檢尿も毒なし、

一月八日 晴、變暖

朝、添削、

「國民」「讀賣」「枯野」の選、

人、等しく喜びて迎へらる、

一月十日 曇、微雨

朝、墓に參る、

辨天橋まで散歩す、

午前中に金澤家を辭す、葛子さん豊橋までとて見送らる、雪少し降る、

豊川稻荷に詣で、鳥屋にて晝食、

夜十時、歸沼、今曉また沼津小學校男子部失火せし由、

一月十一日 曇

午後、岬、眞木子に上野君を伴ひ、自動車にて長岡温泉橋本屋に赴く、すいてゐて、よき具合なり、

一月十二日 晴、暖

郵便局主事、根岸馬太郎氏の訃報あり、悔み狀出す、

夜、女中に娘たち、活動見物、

稻玉さん親子づれにて一寸立寄らる、

越前君見舞金募集狀を出す、

氣味悪きまでに暖き日なりき、

(受信) 甲斐猛、「近代風景」

(發信) 越前君見舞金書狀、「國民」「讀賣」

一月九日 曇

「竹の影」を添削清書して「美術新論」に送る、

十時六分の汽車にて長倉君と三河新城町に赴く、金澤修二君の墓參なり、

部屋に入れば故人の面影また新しく思ひ出さる、家

姉妹、大浮れに浮れてあそぶ、午後二時ころ、歸り行く、

「東日」「枯野」の選、

勞れが出て、ぐったりす、

理髪す、

一月十三日 晴

書少し前、「中世」の選をしてゐる所に電話、古奈舊本陣に昨夜来たたとやらの服部さんよりなり、招かれて行き、書食、

歸りに彼を誘ひ長岡に歸り、料理屋喜樂にて一杯宿に歸りてまた一杯、やゝ過したり、服部さんは夜十時發にて歸る(岡山へ)筈、

一月十四日 晴、寒

起床五時、「中世」の選、

食後「主婦之友」の選、

午後、散歩、

湯づかれか風邪氣味か、氣色冴えず、

夕食をしながら、歌の添削、

自宅より電話二回、

(發信)「中世」「主婦之友」、

一月十五日 晴

午前中、喜志より電話、新城の葛子さんが来たが一緒にそちらに行かうか、といふので、来る様に返事す、夕方、富士人を伴ひ三人づれにて来る、

何も出來ず、「近代風景」に歌を送る、

夜、烈しい風で、家が揺れた、ために終夜停電、

蔵入(十五日)と土曜とにて、客、俄にこむ、

一月十六日 晴、暖

稚兒が淵に散歩し、歸りを古奈に廻り、白石館にて書食す、富士人と野天風呂に入る、

一月十七日 晴

朝、「萬朝」の選、

正午、三人歸り去る、

午後、床に暮す、

一月十八日 微雨

急に歸りたくなり、都自動車を呼んで歸る、宿の拂百四圓なにかしなり、

歸つてみれば葛子さん、まだゐた、

一月十九日 曇

午後、久し振の林佐重郎君來り、堀口熊二君のために揮毫をたのむとのことにて、半折色紙等を書く、同君宿泊、

一月二十日 晴

林君、辭去、

「創作」の選にかゝる、

風邪氣味なり、

一月二十一日 晴

午前葛子さん歸りゆく、

「創作」の選、

一月二十二日 晴

「創作」の選

風邪、少々、

痛烈なる寒さなり、

朝鮮の福島勉君より見ごとなる真鶴を送り来る、乃ち記念にとて子供たちと寫眞をとる、森本さん呼び、料理して貰ふ、

一月二十三日 曇、雨、雪
今朝、昨日よりなほ寒し、

終に一日寝込む、

實に寒い、

一月二十四日 晴、寒
朝の太陽まさしく香貫と徳倉の山のおひだより出

づ、

「創作」の選

終に完全の病人となる、せき出で咽喉痛む、夕方、熱三十八度三分、夜、悪感、臉腫る、

一月二十五日 曇、寒
終日臥床、

午後、稻玉醫師の來診を受く、風邪、なれど發熱のため心臓の故障を大ならしめしものなりと、臉腫れたるそのためなりと、

寝ながらアルス美術叢書の二三を読む、

一月二十六日 晴、寒
終日就床、

讀書と、生活改善に就いてあれこれ考ふ、

一月二十七日 晴

やよよし、

讀書と思案、この病氣を機會にわが朝夕を少し改め得ば幸なりとおもふ、

牛乳を飲み始む、

夕方、山本茂三郎君來訪、おばアさん病氣のために一週間ほど来てゐたのなりと、

稻玉さん來診、

(發信) 福島勉、中村終花、

一月二十八日 晴
夜、床の中にて「桃畑」五首を作る、

「文藝春秋」に出す「小鳥の聲」十五首の添削、これも床の中、

一寸起きて、「婦人之友」の選をやりかけしも、氣色わるくまた就床、

一月二十九日 晴
大に快し、

午前十時頃より、「婦人之友」選了、

「文藝春秋」「講談俱樂部」「都市と郊外」へそれぞれ歌を送る、

「東日」の選、送る、

母に電報爲替にて三十五圓送る、けふは舊の師走二十六日なり、

一月三十日 晴

この頃、毎朝氷點下二度の寒さなり、

けふ、冬風のよき日和、

「信毎」「朝鮮」「大分」の選、(三十一日と間違ひ)

(發信) 福島、

一月三十一日 晴

熱はない様なれど、氣分さつぱりせず、

「中民」「讀賣」「萬朝」の選、

二月一日 晴

朝、赤飯、

午後、鈴木秋灯君、夕方櫻井女、來訪、

久し振にて入浴、大丈夫の様なり、

二月二日 晴

「北海タイムス」「鹿兒島朝日」の奉悼歌の選にかゝる、拙いので骨折れる、

午前、これも久し振に床屋にゆく、歸り來て一杯、就床、

夜、十時着の汽車にて着く旨の、發信人不明の電報來り、中村終花かも知れぬとて自動車をしたて、迎ひにゆきしに、和田環君なりき、次女の遺骨を持つて濱松へ行つての歸り途なりし由、一泊、

二月三日 曇

寒さ、やゝゆるびたり、

前日の續き、二新聞の選を終り、發送、

「創作社便」を書く、

二月四日 曇、寒

三時起床、「改造」に出す「竹の歌」六首の添削、及び「キング」の選、

「創作」の校正終る、

「國民」の選、午後、

節分とて、子供たち豆をまく、いろ／＼の御馳走あり、

(發信) 栗林農夫、中村終花、河合裸石、キング、

二月五日 雪、雨

珍しく雪降る、午すぎまで降り、積らうとして雨となる、

「創作」出來、發送、

二月六日 晴

夕方、東京より村井君ひよつこり來る、

二月七日

朝早く、古川慰君來る、越前翠村君のことについての打合せのためなり、

御大喪の日とて、何やら改る、

鈴木秋灯、田中抱屋の諸君來り、みんなして圍球盤をやる、

夜、古川君辭去、

二月八日 晴

村井君を案内して江の浦より三津までゆく、歸りに

湖月にて飲み始め夜に及ぶ、
夜、村井君歸る、

二月九日 曇
宿酔氣分、

二月十日 晴、寒
午前「中學世界」、午後「週間朝日」の選、ことに「週間朝日」の分は夜に入りて漸く終へぬ、

二月十一日 晴、寒
きびしき寒さなり、

朝、酒をやめてみる、晝はもう久しく飲まず、
母に手紙と鶴の時の寫眞を送る、

(發信) 母、

二月十二日 晴

「北海タイムス」の選、午後「日日」、

大悟法君、正午の汽車にて九州旅行の途に上る、

二月十三日 晴

娘二人をつれ濱に出づれば珍しく網を曳きあて鯖の
漁ありたり、

妻と、借金拂ひについての相談をなし、今後積立貯
金をなすことにきめたり、

「東日」の選、

村井より鯉節搔器送り來る、

手紙の片付け、

二月十四日 曇

朝、晝、ともに酒をやめたせぬか、實に身體が苦し
く、心持の悪さお話にならず、何もようせず過ぎ、

二月十五日 雨
珍しく雨降り、且つ珍しく暖し、

正午、雨にびしよ濡れて北海道の社友米光登秋君來
訪す、天理教の教を受けに丹波と大和にゆくのなら
と、すゝめて一夜泊める、

けふも苦し、あまり苦しいので、二三日の旅でもし
て來ようとした今日、この大雨で駄目、

二月十六日 曇

「枯野」の選午前、午後「創作」第一詠草の選、

止むなく朝晝コップ一杯づゝ飲むことにする、

米光君、正午出立西行、

二月十七日 曇後晴

朝、八時の汽車にて静岡まで、静岡より草鞋にて歩
く、久し振のことに快し、鞠子の宿丁字屋のとろ
ろ汁うまし、宇都の谷峠も意外によき峠であった、
岡部にて、早けれど泊る、宿唯一の宿小手平屋にて
の滑稽談あれど略す、行程三里半、

静岡岡部川橋を渡つてより附近の丘に梅甚だ多く恰
も満開であつた、

二月十八日 晴

朝、岡部を立ち、御前崎に行かむとて輕鐵に乗る、
乗心地甚だわるし、且つ隣客より、この近くの清水
観音のおまつりありて賑ふ由をきき、乃ち汽車を捨
て參詣に向ふ、丁度其處は藤枝の宿であつた、

なるほど、驚くべき賑ひであつた、寺は藤枝より一
里半ほどの所にあり、小一里岡を登るのであつた、
四方の眺めもよし、

藤枝の驛前にて書食、終つて乗車、夕方歸宅、

二月十九日 曇後晴

午前、和田徳太郎君來り、我人道青年團の依頼にて活動寫眞を脚色、その中に字幕として入れるのだからとて松原の歌を半折に書かせらる、午後、鈴木秋灯君來訪、

「萬朝」の選、

二月二十日 曇、寒

またべらぼうな寒さなり、雪催ひして終に降らず、

「北海道行脚記」を書き始め、思ひの外捗りたり、

二月二十一日 曇、寒

「行脚記」を午後まで續け、そのあと「創作」第二詠草の選、

頭の重きはやゝ直りたれど、呼吸苦しきは増す様なり、

(發信) 「萬朝」

二月二十二日 雪まじりの雨、寒

曉起、「行脚記」を書く、案外に筆進む、

何といふいやな天氣か、凍み痛む寒さなり、

二月二十三日 曇、晴

「行脚記」三月號を書き終る、五十八枚なり、

「創作」の校正、初めて出づ、

東方寺の紹介にて、橋本靜惠なる夫人來訪、入門の申込なり、沼津上十阿波屋の娘さんなりと、

午後、漸く暖し、

二月二十四日 晴、暖
漸く春らしき日和なり、

午前、東方寺天岫接三氏夫妻に娘、石原宗三郎(阿波屋)氏夫妻に娘二人、七人のお客さんにて賑ふ、みな歌がやつてみたいとの訪問なり、

午後久し振に外出、床屋にゆく、

身體、段々よいやうなり、感謝、

二月二十五日 曇、夕方雨、寒
いやな天氣なり、

「警務彙報」「東京日日」の選、

二月二十六日 曇

朝食の際、門林兵治君上京の途立寄り、晝、土肥へ

行く、

「創作」の校正、

二月二十七日 晴

風強し、

「創作」の校正の合間々々に「婦人之友」「萬朝」「朝鮮新聞」の選、但し日曜なれば發送は明日、

二月二十八日 晴、寒

曉床の中にて寒さ身にしむ、零下一度、

廣島縣の山隅衛君、朝食の時に來訪、晝飯を共にして、上京しゆく、

「讀賣」の選、

夜、「創作」三月號出來、

三月一日 晴、寒
朔日とて、お赤飯。

朝食中、宮崎高等農林學校書記谷川弼次郎氏來訪、校歌を作り貰ひたしとの依頼なり、引受く、郷里と農林とがなつかしくて。

同氏と入れ替りに、門林君土肥より來る。宮下茂君の病氣、思はしからざる由。

「讀賣」「大分」「福日」を送る。

三月二日 半晴

門林君、湯ヶ島に向ふ。

「静岡新報」「中國新聞」「北海タイムス」「信濃毎日」を見、送る、大勉強なり、身體のよくなりしおかげなり。

夕方、鈴木君來る、

尙節句とて五日飯、お雛様の前にて賑かにみなしてたべる、

三月三日 曇、寒

今日も大勉強、午前は「少年俱樂部」のために樋口一葉の文章の評釋を書き、午後は同誌の選歌。手紙數通を書く。

上野君の郷里より雲丹を貰ふ。

いやらしく寒き日和なり。散歩三回。

夜、お節句とて娘たちの演藝會あり、見物人となる、うまいものなり。

三月四日 雪、雨、寒

何といふ氣違ひ日和ぞや、雪降り氷雨降り風吹いて
ひもすがらなり。

小さな紀行文を書かむとしたれどこの天氣にて能はず、選歌に努む、「中學世界」「讀賣」「時事」を送る、

三月五日 曇

寒さや、ゆるびたれど相變らずの天氣なり、氣色わるく何も出來さうになければこの間より評判をきいてゐた活動「水戸黃門」を妻と富士人として(畫席)見に行く

館内にて服部さんに聲かけられ、残りを見残して出で、「まつゆ」にて夕飯をくふ、しかして別る、

三月六日 晴、雨

朝久しぶりに日光を見る、

松原をとほく散歩して歸り來れば、久しぶりに長倉田中の兩君來訪、引きとめて晝食を共にす、

夕方、また怪しき雨降り來る、

「國民」の選、

三月七日 快晴

朝五時、厠の窓より見れば空美しく晴れたり、乃ち「萬朝」の選をしておき、大急ぎにて食事を済し、六時四十五分の汽車に乗るべく急ぐ、間に合ふ、田中君も出勤の時間とて同車、裾野驛下車、鈴木秋灯君を誘ひて湖尻峠を越え、仙石原に到る、同君の友人植松君も同行す、峠近くより雪ありしが、越えて先は照を没する深さなり、路も見えなくなつた仙石原の枯野を横切つて温泉仙郷樓に投宿す、

案外の元氣にて、この雪の山路にさまでにへこたれず、鈴木君を驚かす、

蘆の湖畔、雪中の焚火は忘れられず、

三月八日 曇

一日滞在せむかと考へたれど、天氣模様怪しければとて強ひて打ち立つ、大湧谷の湯元にゆく宿の男を案内として登り始むるに、雪昨日より更に深し、昨日は野、けふは林の中をゆくなり、雪を帯びたる山毛櫛、百日紅、その、しな等の老木、既に春を孕みて末梢淡く茜に含む、大湧谷より二人となり、姥子を経て湖尻に出で、船にて箱根町に渡る、大急ぎにて權現さまに詣づ、此處の老杉の雪、また見ごととなり、それより自動車にて沼津に歸る、この道も案外によく、子供をつれて登らむなどおもふ、

鈴木君一泊、

脚痛めど、この分ならば先づ上々なり、知らざりき、昨夕六時、丹後地方に激震あり、死傷千を越ゆと、

三月九日 雨、夕方暴雨

流石に疲れて、(心のつかれなり) 半日就床、案のごとく夜なかなより雨烈しく、夕方かけて暴風雨

となる、

和田徳太郎君來訪、鈴木君滞在、

丹後地方の震災被害、いよゝゝ烈しきを傳ふ、

三月十日 晴

よき晴なり、

午前、和田徳太郎君に頼まれありし「百人一首の戀愛觀」の序文を書く、

午後、短歌雜誌に出す「濱邊」の清書、

「少年俱樂部」のために漱石の「猫」の一節を註釋す、

午後、鈴木君歸り、門林兵治君湯ヶ島より來り泊る、

夜なかに俄に暴風雨めき、電光閃き疾風吹き、怒濤、まさにわが家に迫らんとするに似たりき、

三月十一日 曇

「主婦之友」の選、午前、

午後、「東日」の選、

風烈し、

午後、床屋にゆく、

高橋商店より四斗樽一個到着、

三月十二日 半晴、寒

また例の寒日和なり、

「東日」の選を續け、次いで「大分」「北海タイムス」にて一日を終る、夕方「萬朝」、

寒さのせあか、氣色よくあらず、

三月十三日 風雨、寒

いよゝゝバカゲたる天氣なり、夜なかなより降り始めしが、朝がたより風を加へ、夕方に及ぶ、まるで秋の末の氣候なり天氣なり、

「九州日日」「讀賣」の選、「萬朝」と共に明朝投函

平賀、福島勉君に半折會の手紙を出す、

和田、高鹽、菊池の三君より雜誌創刊の手紙來る、

直ちに返事認む、

三月十四日 半晴

午前四時起床、「創作」の選にかゝる、

第一、第二詠草を終日かゝつてほゞ見終る、午後は流石につられけれど、毎朝この位めに起きたし、

三月十五日 雨

午前四時起床、昨日のつゞき「創作」の選にかゝらむとせしが、フト心變り、起きがたにみし夢のこと

を五六枚の小品につゞりぬ、

風邪心地にて、午前一寸、寝む、

あと、「創作」の選、

雨なれどけふは悪からぬ雨、

高鹽君より「峽間」来る、祝電を打つ、

三月十六日 曇

また例の深く寒く重き曇なり、

終日「創作」の選、

午後長倉君來訪、湯呑を貰ふ、

夕方より微雨、

女中活動見物、

三月十七日 晴

「創作」の選にかゝつてゐた所へ、鈴木秋灯君勢よく飛び込み來り、木を持つて來ましたといふ、先日の植松君に、その木の主岩崎君といふ二青年をも伴ひたり、木は竹柏、もつこく、楓の三本、みなよき木なり、早速植ゑて貰ふ、夕方、三人とも歸る、

午後五時四十七分、大悟法君歸り來る、松葉杖をつきてなり、瘦せたり、

三月十八日 晴

植木屋を呼び、昨日植ゑし木々の手入れ、及びわが縁側先の布袋竹とぐみの木との植ゑかへなどをなす、

庭に立つあひだぐくに「創作」の選、而して漸く詠草だけを見終る、

三月十九日 晴

上野君を伴ひ、耕文社に到り、選の濟んだゞけの原稿を渡す、

それより電車にて三島に到り、大社に詣つ、町のさま、春景色なり、

夕方より三島館にて早稻田の校友會宴會に出席、出席者十一人、割に氣持よく賑かであつた、三階より見下す海、恰も満潮とて非常にゆたかに見えた、

三月二十日 雨

宿醉氣分にて終日、

三月二十一日 晴

午前、「創作」の「批評と添削」を書き、午後同じく女の人の歌を選む、

快晴なり、

珍しく濱にしらすの大漁あり、子ら一さる貰ひ來る、

三月二十二日 晴、暖

朝食後、越後彌彦山麓なる堀内彦陽君、本願寺參りの姉の供せし途中なりとて立寄り、半日を歌話に耽り、十二時辭去、作歌に熱心なる難有き程なり、いつかは彼が郷里を訪はむとおもふ、新潟行に乗り西三條乗換、彌彦驛下車なりとよ、

昨日の續き、女人の選、完了、

急に暖く、桃俄かに咲かむとす、

西風、甚だ強く、漁師たちが庭に入りて網をすく、

三月二十三日 晴、暖

晴と暖さと續く、而して勉強したくなし、

床屋にゆく、

植木屋来り、竹を運ぶ、眞竹廿五本なり、見ごとなる竹にて、これにて漸く安心せらる、

岬、眞木子、成績表を貰ひ歸る、二人共上出来なり、

「創作」の校正、出で始む、

三月二十四日 曇、微雨、寒

ベラボウに寒し、昨日七十度今日五十度なりといふ、

竹の植付け、終る、豫想以上に佳し、大に安心す、

曉起して、「北海道行脚日記」を書く、終日これにか

ゝりたれど、竹に心をとられ、とかく筆進まず、

このおやぢけふはさゝにはゑはなくにだけに酔

ひしれうつゝともなし、

三月二十五日 曇、雨、暖

「行脚記」を書き續く、

朝八時ごろ、臺灣の尾崎孝子さん、上京の途中なりとて来訪、十年振の對面なり、夕方四時半、中村終花君、やつて来る、

夜、久し振に賑かに飲む、

三月二十六日 雨

小休みなく、繁き雨なり、

曉起、創作社便を書く、

孝子さん、晝の汽車にて立つ、

中村君があるのに、終日、何かと忙しかりき、

鈴木君、早生のたうもろこしの種と田芹とを持って来てくれる、

三月二十七日 雨、曇

晝まで、爲事、

晝より自動車にて三島町驛まで、其處より電車、また自動車、夕方湯ヶ島湯本館に着く、同行、中村君、

岬子、眞木子、まさ子つゝ人、

湯ヶ島は相變らずいゝ、河縁の湯槽が改築してあり

き、

三月二十八日 晴

雨後の曉色、何とも云ひがたし、

木立の湯より二百枚橋の邊を散歩し、歸り世古の湯

々川館にて晝食、

散歩や入浴や闘球盤やにて終日楽しくすごす、

夜、酔ひて唄などうたふ、

三月二十九日 晴

朝食後、湯本館出立、近道をして古奈の湯に出で、

其處にて晝食(酒屋)、そこより自動車、電車、自動車にて午後四時ころ歸宅、

藤原染子さん、来る豫告ありたれば待ちたれど来らず、夜行にて中村君辭去、永い間待つたのであつた

が、サテ、別れとなればあつけなく速い、

三月三十日 雨

休息、

夕方、染子さん、二人の子供をつれて来訪、話、盛んなり、

「創作」四月號出来、

三月三十一日 曇

染子さんの六時發の汽車にて立つを驛まで見送り、

あとはうやむやに一日をすごす、

今日あたりより、桃満開なり、

落葉松を植ゑかへたり、

四月一日 晴

べらぼうに暖し、

朝、六時半の汽車にて上野君、東京にゆく、

朝食をすませし所に勝承夫（報知記者）君名古屋支局詰に赴く途中とて來訪、正富君の新進詩人十週年祝賀の話をなす、

夕方、岡田純次郎氏夫妻に内川、勝間君等十人づれにて來訪、庭にて冷酒を酌む、

窪田まさ子（神田新石町八、窪田藏一娘）東京へ歸

り去る、お互ひに名残惜しかりし、

（發信）「枯野」「警務彙報」

四月二日 晴

蒸し暑くして、風のみ冷し、

朝鮮、日向大分、等の半折會につき終日頭を使ふ、平賀、福島、東の三人へ依頼、相談状を出す、

「萬朝」の選、

四月三日 晴

非常の暖さなり、松原にも濱にも常になき人出をみる、旗日の故か陽氣のためか、

松原を歩きつゝ、出來さうにて歌出來ず、

「鮎つりの歌」の推敲、

午後、肴屋の息子さん橋爪、三字分アキの兩君を誘ひ來訪、

四月四日 曇

文章俱樂部に「歌二題」と、「キング」に「湯槽の朝」を出す、

「少年俱樂部」の選、

四月五日 曇

此頃の季節のせむにや、うつとうしさ限りなし、家内みなそれをいひて半病人なり、中に岬子は幾度も嘔吐し、ものをたべず、

少年詩「登山」を作る、

午後、富士人と床屋にゆく、歸りを千本公園に廻り櫻を見る、今年は花の色まことに見苦し、何處のもさうの様なり、なほその途にて、たらの芽を摘み歸る、

四月六日 晴

また、冷し、昨日より十五度の下降なりと、

爲事、手につかず、僅かに「時事」のために「庭さきの森の春」五枚を書く、

眞木子登校、岬子や、快けれど休まず、

四月七日、晴

午前、「静岡新報」の選、

おひるより、ぶら／＼と歩いて町を離れ、石田より東海道を分れて箱根裏街道を歩く、げんげ咲き雲雀なく田中の徑、久し振とて快し、佐野近くなりて、雨に會ふ、かくて夕方四時半、五龍館に到着す、溪間の雨、まことになつかし、山ざくらも丁度まさかりなり、

四月八日 晴

朝沼津に電話をかく、食事中、歌數首成る。
食後、景ヶ島に散歩す、岩の形にこの前に知らぬ面白味を覺えたり、歌數首を作る。

十時ころ宿に歸れば丁度喜志子と富士人の沼津より着いた時なり、

晝食後、二人を案内してまた景ヶ島にゆく、山櫻、いまをさかりと雑木の山に咲けり、

夕方、田中要吉、鈴木秋灯兩君を招いて夕食を共にす、鈴木君、この十二日に結婚するとなり、

四月九日 晴

曉起、喜志たちの眠つてる間に散歩に出で、歌數首を作る、

九時五龍館發、鈴木君同伴三島町まで汽車電車、大社に詣づ、登喜和といふにて鰻をたぶ、二時すぎ歸宅、

庭の山櫻も満開なりき、

四月十日 晴

朝鮮の福島勉君より返事來る、乃ちそれにより朝鮮行の豫定をたてたり、四月三十日當地發、金川、廣島に立寄り、八日釜山に渡ることゝす、

金川の服部、廣島の三浦、山隅三君に、右の用にて手紙をかく、

夕方、古賀安治君の手紙をもち、江口某來り、家に置いてくれといふ、斷る、

夜、伊藤保子さん、水野威君と結婚せし由をきゝ、あしが、夫婦づれにて來訪、とても嬉しさうなり、

四月十一日 晴

やゝ肌寒の、若葉日和ともいふべき快きなり、

朝鮮行の事を考へつゝ、終日を送る、そのことにつ

き、市山盛雄、武田全、徳政龜一三君に手紙を出す、

佐野五龍館にて作りすてし歌を清書す、數だけは四十八首ありたり、

夕方、微雨來る、

四月十二日 晴

けふもよき日和なり、

矢張り朝鮮行の事に没頭、午前、豫定(日程)變更のことにつき福島君に長い手紙をかく、なほその事より、この秋に延さむと思ひあし大分宮崎にての揮毫會をも朝鮮の歸りに片附け來らむと決心す、

午後長倉君、中村不折の軸物を持ち寄贈せむとて來訪、早速頂いて床にかく、

金澤蔦子さんより蕨送り來る、

四月十三日 晴

また朝鮮行のこと、

若山甲藏(宮崎市橋通)、福島勉、平賀君等に出狀す、

晝すぎ、鎌倉の西山きよ子さん、婆やを伴ひて來訪、二時間近く話して、修善寺へとて辭去、

午後四時四十一分、佐野の鈴木秋灯君が結婚披露宴に行く、歸りは十時、大に酔ひ、植松君、送り來る、

四月十四日 雨

寒き雨なり、

やゝ宿醉、

「主婦之友」の豫選、

四月十五日 雨

延岡の谷次郎君に出状す、半折會の事についてなり、

「主婦之友」の選、終る、

十五日渡鮮（日延）承知の旨、福島君より電報來る、
徳政君より返書あり、

四月十六日 晴

朝鮮にての半折會趣意書校正出づ、校了、

「大分」「萬朝」の選、

（發信） 氷室、福島、

四月十七日 晴

「北海道行脚記」かきに終日かゝる、

富士人、恵と角力見物、

（發信） 徳政、

四月十八日 晴

昨夜、どうした具合か飲みすぎ、けふ宿醉氣分、殆んど何もせず、

午後、喜志に富士人と三人、河口へ散歩す、

夜、みよのさん結婚の事にて、前沼津驛長會彌謹三氏、他の婦人と共に來訪、話まとまる、

四月十九日 晴

朝鮮の福島、市山兩君より來書、双方へ返事出す、
福島君のは日程表なり、

趣意書二千枚出來、福島、市山へ送る、

午後床屋にゆく、

三宅みよの女史、今日よりまたうちへ來る、

田中義一男へ組閣の大命降下ありしと、

（發信） 福島、市山、

四月二十日 晴

朝鮮の社友十九名へ挨拶状を出す、名前を書くだけでないのもあり、午前中かゝる、

午後、「北海行脚」を書く、季節のせゐか頭重く、一向に捗らない、

夕方、職業別電話名簿作製募集員來る、一圓出す、
東京南千住八四〇、復興印刷所、山本明太郎といふ者なり、

夜、眼をさますと枕許に電報が置いてあつた、福島君からのもの、一首の歌なり、曰く

企ては心のまゝにかなひたり今は楽しく酒くむ所

四月二十一日 風雨

時化じみて吹き降る、若葉美し、

午前中、「北海行脚」を書く、

午後、谷次郎君より誠に熱意ある返事來る、早速また返事す、その他手紙數本書く、

耕文社を解雇されし職工松下某、奉加帳を持ち來る、五圓出す、

（發信） 谷、若山、東、三浦、福地、

四月二十二日 曇

風強く、俄に寒し、

午前中、「創作」第一詠草の選、

午後、先日佐野にて作りし歌を清書す、四十餘首あり、捨て難きものなきにあらず、推敲す、

夕方、鈴木君例の如く飄然と來訪、やがて、みよのさんの花婿殿にきまりし木村助役、内田さんと共に來訪、食卓を圍み、八時まで飲む、よき人なり、

四月二十三日 晴
寒けれど晴、青嵐日和なり、

午前、朝鮮に送るもの其他、短冊半折を揮毫す、

午後、「婦人之友」を少し選ぶ、

田中君來訪、

岬子、眞木子、富士人、みち、大悟法、惠、活動見物、

四月二十四日 晴
よき晴、松原の若葉まことに美し、

午前、「婦人之友」の選、

午後、社友(岩手縣水澤の人にて、今、興津に滞在)高橋なる子さん來訪、歌を見てあげる、人も歌もよし、

今日は旅人(今日)眞木子(二十二日)富士人(二十六日)の誕生祝ひをなす、

四月二十五日 快晴

松原を歩きつゝ、歌など高唱せむよき日和なり、

愈々近づきたれば、谷、山隅、市山、福島君等に出狀す、市山君には半折見本を送る、

「創作」第二詠草組を見る、

正午、山形縣よりみよのさんたちの父來る、

(發信) 谷、山隅、市山、福島、

四月二十六日 晴

「創作」第一詠草の残りを見終る、「批評と添削」を書く、

午前、櫻井夕陽子、次いで石原かつ子女史來訪、おひるをお縁側にてたべる、一緒に、

夕方、木村助役來訪、

午後は何やらおちつかず、

朝鮮より景氣よき便り來る、

(發信) 平田、大島、

四月二十七日 晴

午前、「創作社便」を書く、

午後「讀賣」の選、

夕方、我等夫婦、三宅老人、内田細君に迎へられみよのさんを送りて木村家に到る、いはゞ假祝言なり、

四月二十八日 晴、曇

「讀賣」(新設懸賞もの)「中民」の選、

三宅老人、山形へ歸る、

夕方、長倉、田中兩君を招き、お別れの宴を催す、

二階より見る松原、桃畑の若葉の色素敵なり、

四月二十九日 晴

「中央公論」に出すべき歌「溪間の春」の推敲に半

日を費し、正午、送る、
午後、沼津館の主人來訪、千本松原の色紙をかゝる。

出立愈々近づき、事いよ／＼手につかず、苦し、

(受信) 毛利、福島、市山、

(発信) 島中、毛利、福島、市山、

四月三十日 晴、曇

宮崎高等農林學校の校歌を作る、割に樂に出來たり、

朝鮮(京城)へ出す挨拶狀十數通を書く、延岡の佐竹香春二君にもかく、

午後、長崎の高島貞雄君、その老母と共に來訪、夕方鈴木君蔵と／＼とを持ちて來訪、

「創作」五月號、出來、

五月一日 晴、曇
お赤飯。

高島君母子、十時五十分の汽車にて京都へ。

いよ／＼落着かず。

京城のピラ、市山君より送り來る、大變な騒ぎの様なり、

(発信) 市山、谷、兩長田、

五月二日 曇

「朝鮮新聞」「警務彙報」「少年俱樂部」「國民」の選、

日向、岩井川の河野クラより椎茸と猪狩毅についての問合せ來る、

夕方、富士人をつれて長倉君方にゆき、御馳走になる、母、たくさん熟れぬたり、ラヂオを聞く、

五月三日 風雨

荷造りをなす、惶し、

山隅衛の歌集原稿を見る、

心正堂に、全南分の揮毫材料を註文す、

床屋にゆく、

杉山甚七、メジカ一本を提げ暇乞にとて來る、

五月四日 晴

いよ／＼今日出立なり、

朝三時起床、便所の窓よりみれば、昨日の風雨あと

なく晴れ、星美しく輝けり、

十二月五日

今日より、昭和二年の日記をつけむとす、(註、以下昭和三年度の日記十二月分に)

昨日今日、元氣よく、自ら嬉し、

「新潮」に「木枯紀行」を送る、

朝日記者、同情週刊のものを書きに東京へ行きくれといふ、揮毫だけする事にし、斷わる、

十二月六日

『森、湖及び人』紀行文を「女性」二月號分として送る、

『創作』のピラ(「潮みどり子詠草」)出來、

暖く、浪高し、

歌、少しづつ、出來むとす、

十二月七日

「朝鮮新聞」の選、

歌、少し出来る、昨日今日の分十首を集めて「改造」に送る、夕方かけて俄に寒し、

十二月八日

午前、「中學世界」の選、

午後、「創作」 岫雲章邊の選、

十二月九日

つめたき雨、

鈴木秋灯君來訪、

「創作」の選、

十二月十日

「信毎」「婦人世界」の選、

十二月十二日

快晴、不意に少し歩いてみたくなり、沼津より三島まで汽車、それより裾野まで歩く、約二里、歩き得

たり、且つ、歌三四十首を作る、夕方歸る、理髮、

十二月十三日

午後一時より三時半まで、中學校の父兄會に出席す、往復俚なり、

十二月十四日

「創作」の選、

十二月十五日

「創作」の選、

十二月十六日

「婦人世界」の選、北海タイムスの新年號選、

十二月十七日

「創作」の選、

十二月十八日

鈴木秋灯君、遊びに来る、「創作」「萬朝」「婦人之友」の選、今朝より冷水浴を始め、

十二月十九日

極めて寒し、

「創作」の選、

花田美代子女（九州對馬への歸途）來訪、一泊、

十二月二十日

夜、郵便局の米山君來訪、

「創作」の選、

十二月二十三日

午前中「創作」午後「大分新聞」「山梨日々新聞」の選、

曉方より、痛快なる雨降りて、暖し、夕方快晴、

十二月二十四日

「朝鮮新聞」「九州日々」「福岡日々」「中國新聞」「中國日報」「鹿兒島朝日」の選、

耕文社の細君と、舊あてまた今度耕文社の番頭になつた長澤と二人來訪、同社舊番頭青川の同社退引、

新たに印刷業を起す事につき、懇談、烈寒、烈霜、冷水浴、

昭和三年

一月十八日 雨、寒
「時事」「大分」の選、

何となく心地よからず、

母に二十圓、振替より拂出す、

一月十九日 晴、暖

朝食後、床屋に行く、

そのかへり大門堂にて、半身の寫眞をとる、

「婦人之友」の選、

二月一日 晴

二三日來の風邪や、快く、離床。

午後、手紙四五本をかく。

尾崎くに女よりはまゆふのたねを送り來る。

「創作」二月號昨日出來。

(發信) 尾山、飯田、山本明のオヤヂ、信次郎、

二月二日 晴

風邪また悪く、就床終日、「大菩薩峠」を讀む、

越後の社友長藤正司君より酒一斗樽送り來る、

二月三日 半晴

前田夕暮君より尾上先生謝恩會のことにつき手紙來る、難有き企てなり、

紅玉堂より石川啄木歌集のことにつき、謝絶し來る。

午前中、就床、午後、「少年クラブ」の選、

早稻田校友會支部の宴會に出席を斷る、

(受信) 紅玉堂、前田、

(發信) 前田、正富、

二月四日 晴

風邪にてねてゐた所へ、「少年俱樂部」の加藤謙一君來訪、共に松原を散歩し、晝飯を共にし、夕方歸る。

二月五日 曇

吉野榮藏君來訪、あとより田中君も。共に晝食、吉

野君二時頃、田中君夜まで、

田中君たちと花を引く、

(受信) 前田夕暮、

二月六日 雨

終日雨、

二月七日 晴、暖

べらぼうなる暖氣なり、

「信毎」「東京時事」の選、

服部さんの阿母さん來訪、

(受信) 岡野

(發信) 谷、岡野、

二月八日 晴

午前、「警務彙報」「枯野」の選、

午後、「讀賣」

午後、長倉君來訪、母堂病氣の由、道了大山行の話

などす、

借金拂のあてに添削部を設けむかなと思ふ。

福田夕咲君より鶴のわたの鹽辛送り來る、

「主婦之友」の選、

(受信) 福島勉、平賀、市川道、

(発信) 主婦之友、

二月九日

午前より午後にかけて、「北海タイムス」の選、
薬スベルミン送り来る、

午後、中學世界の選、

(受信) 吉野榮藏、プラトン社、

(発信) 福島、坂本、福田夕咲、藤井光治郎、

二月十一日 曇、暖

「婦人世界」「萬朝」「大分」の選、

雨の後の暖さなり、

田中要吉君方にゆき、マントを注文す、

(発信) 「婦人世界」「萬朝」

二月十三日

ひよつこり、町田早苗君、伊豫松山よりの歸りなり
とて立寄る、夕食後、辭去、

二月十四日、雨、寒

寒く部屋暖し、
半日、寝る、

「潮みどり集」を讀む、

鈴木秋灯君來訪、

東南風吹き雨大に降る、

(受信) 中村、谷、

二月十五日 晴、暖

お赤飯、

おひるより富士人を伴ひ、狩野川々口に遊ぶ、昨日

の雨にて黄濁、灣内に及べり、

(発信) 中村、池上、

二月十六日 曇

静岡の静岡新報社より電話にて同社長の選挙に應援
してくれとのこと、固辭せしも聞かず、大悟法君を
伴ひて行く、先づ同市内寺町感應寺に潮みどり子の
墓を訪ひ、轉じて新報社へ、それよりは法月君を訪
ひ、社の自動車にて江尻、清水、(にて夕食)と走り、
興津にて講演、夜十二時歸る、
銀座資生堂の河東といふ人來り、短冊を書くべく約
束させらる、

二月十七日 晴、寒

午前、「婦人之友」の選、

午後、妻と共に表具屋にゆき屏風を注文す、

武生町池上小芳女へ椎茸を送る、

二月十八日 晴、寒

三十二度といふ寒さなり、

「婦人の友」の選に一日かゝる、

「讀賣」へ歌の題十五題を送る、

(発信) 福島、坂本、婦人の友、小林昌作、

二月十九日 晴、寒

「創作」第一詠草の選及び同岫雲集の選、

岬子、眞木子の學校にて音楽會あり、妻ゆく、

マントの假縫ひ出來々る、よろし、

二月二十日 快晴

選挙にゆく、歸りに床屋に寄る、

午前「萬朝」午後「東日」の選、

(受信) 『婦人之友』
(発信) 「萬朝」

二月二十二日 晴
「創作」第二詠草の選、

庭先の枯芒を刈る老爺を呼び、茶を出す、

二月二十三日 晴、暖
「朝鮮新聞」「讀賣」の選、午前、

芝の高橋商店に酒代百二十二圓三十三錢送る、

(受信) 村上、
(発信) 郡山辰巳、村上文子、

二月二十四日 晴、暖
朝より「創作」第二詠草組の選、

十一時ころ、吉田孤羊君、石川啄木全集のことにつ
き、來訪、晝食後、濱松へ向け出立、

二月二十五日 晴
「創作」の選、「質疑應答」執筆、

起きた時、頭痛を覚えしが、午後、懶くて困れり、

二月二十六日
旅の空想、

一、千葉平野、沼、九十九里、利根川、(これは梅雨
ころか)

二、福島に瀧櫻を見、歸りに(高鹽訪問)日光に寄
り中禪寺、湯元まで行く、か、も一つ、那須か、
鹽原温泉にも立寄るか、

三、長尾峠をこえ、熱海に出で、下田にゆき石廊崎
に遊ぶ、

午前、「萬朝」「時事新報」の選、

午後、富士人と共に町にゆき彼のために空氣銃(十
二圓)自分自身のために旅行用帽子、サルマタ、靜
岡縣地圖を買ふ、

二月二十七日 晴

二月二十八日 晴
「信毎」の選、

「創作」の校正、
旅行の空想、

二月二十九日 晴
「信毎」「讀賣」の選、
「創作」の校正、
「萬朝」の石井氏より同紙週間文藝欄新設につき來書
あり、

(受信) 石井迷花、伊セ崎海花、
(発信) 石井迷花、

三月一日 曇

「北海タイムス」「時事」の選、

夕方、高島友次郎君來る、活動見をすゝめ、一泊、
お赤飯、

三月二日 雨、暖

今朝、五十度のぬくとさなり、

「都」新聞に小品「千本松原の春」をかか、

高島君、歸る、

昨日今日が松原の椿の眞さかりならむ、

(受信) 長谷川、藤井、
(発信) 飛田角一郎(都)

三月三日

桃の節句にて、家内、みな賑はう、

富士人、姉たちに伴はれて學校へゆく、

床屋にゆき、足袋、石ケン、など買ふ、明日の用意なり、

(發信) プラトン、少年クラブ、

三月四日

木賀泊り、

三月五日

湯ヶ原泊り、

三月六日

熱海泊り、

三月七日

伊東泊り、

三月八日

富戸泊り、

三月九日

下河津泊り、

三月十日

湯ヶ島泊り、

三月十一日

歸宅、

三月十八日

村上文子さんたち、三人來る、

三月二十四日

越中の人、片口安之助君來訪、

三月二十五日 曇

正午近く、大阪の三池葛於君來訪、一泊、東京行の途中なり、

三月二十六日 雨

三池君出立、烈しき雨なりし、

「萬朝」の選、

三月二十八日

早稻田校友會へ行く、夜、

四月一日 曇

昨日の風に倒れし庭木の手入、

北海タイムスの選、

東京より中西はつ子さん來訪、夕方歸京、

夜、小生の外、活動見物、

四月二日

宮坂道子さん、夕方來訪、一泊、

四月三日

みち子さんに、岬子眞木子富士人と我等夫婦と自動車にて三津に枝垂櫻を見、長岡温泉に到り一浴し、歸る、道子さん、夕方歸京、

四月四日 晴

午後、早稻田校友會のことにて、丸二藥店に鈴木君(安之助君弟)を見舞ふ、

四月五日 晴

午後、早稻田校友會のことにて、丸二藥店に鈴木君を訪ひ、浮影樓の井上君を待合せ、三人にて、小生作早稻田校友踊の下見に行く、案外に賑かの踊にな

つてゐた、

午前、富士人を伴ひ、その入學式にゆく、

夕方、岡山縣の社友服部白風君來訪一泊、

四月六日 曇

孟宗に筭四五本出でたり、

服部君辭去、

年譜

明治十八年（一歳）

八月廿四日（陰曆七月十五日）朝、宮崎縣東臼杵郡東郷村坪谷一番戸（現在三番地）に生る。家業醫、父立藏、母まき、三姉あり、繁と命名さる。

明治二十二年（五歳）

父立藏西郷村醫に聘せられ牧水も一家と共に同村田代に轉住す。

明治二十五年（八歳）

四月、田代尋常小學校第一學年に入學せしも、通學距離一里餘、甚しく不便なれば、二三ヶ月にして義兄今西吉郎の校長たる羽坂尋常小學校に轉校、山陰なる叔父の家より通學す。
十月、父立藏、坪谷區より歸宅を勧められ坪谷に歸る。よつて牧水も羽坂校より坪谷校に轉す。

明治二十九年（十二歳）

三月、首席にて坪谷尋常小學校を卒業。

四月、父母の膝下を離れ、延岡に出で、同町高等小學校第一學年に入學。當時尋常科四年制にして宮崎縣の僻地に於ては高等小學の設立されし所少く、高等科入學のために出郷せるなり。同町外恒富村三ツ瀬の佐久間方に寄寓してそより通學す。佐久間氏に兒なし、夫妻に愛で慈しまる。

明治三十年（十三歳）

第二學年に進級。常に級の上席にありて第三席を降らず、作文算術等を得意とす。當時牧水の受持教師に日吉昇氏あり、土地隨一の文章家として自他ともにゆるせし人、氏特に牧水の文才を愛し大いに囑目せらる。
牧水は腕白者なりき。色黒く小作りにして運動會には小なる組に入れられしが、競走にては常に先頭を切り二着と落ちしことなし。
この頃より村井弦齋著「小猫」「櫻の御所」等を讀み始む。

明治三十一年(十四歳)

第三學年に進級。通學の都合其他の關係にて佐久間方より轉じて本小路俗稱御殿下、山邊方に寄寓す。文學に對する憧憬更に加はる。

明治三十二年(十五歳)

第三學年を修業す。

此年延岡にはじめて縣立中學校設立さる。牧水直ちに入學試験に應ず。當時延岡には舊藩主内藤子爵の古く設立されたる亮天社と稱する中學程度の私學校あり、はじめて縣立中學校の設立さるゝに及び同社の二年級又は高等小學四年卒業生など俱にこの入學試験に應ず。牧水この内にありて第四番の成績にて入學す。

同校寄宿舎明德寮に入る。副生長たり。

新校長に山崎庚午太郎氏あり、年少氣鋭、スバルタ式の教育法に傾倒し校則峻嚴、史學專攻の人なりしも文藻豊かにして「山家集」「桂園一枝」等を受讀し校友會雜誌等に華麗の文を寄す。牧水に及ぼせし影

響少なからず。

國語漢文教師笹井秀次郎氏に愛せらる。明德寮は毎月一回土曜日の夕茶話會を催すを例とす。講演會餘興等のうち牧水の國文朗讀は常に好評を博す。

明治三十三年(十六歳)

二年級に進む。運動競技等より漸く離れはじむ。數學に對し嫌惡の傾向を生じ、國漢文に傾倒し盛んに文學の書に親しむ。ひそかに馬琴の八犬傳を求め之を耽讀す。當時生徒は一般に小説類の繙讀を嚴禁せられしも文學に對する熱意は外出先より禁書を携へ來り、耽讀するに到らしむ。偶々一夜舎監に發見され禁書の火中を命ぜらる。借本なりければ百方寬恕を乞ふも許されず、遂に泣くゝ竈下の灰となす。此頃より寮の窮屈なる生活を潔しとせず。

擊劍の稽古中横面を打たれて鼓膜を破り晩年まで左耳の不自由を感ずるに到りしもこの年の事ならむ。

明治三十四年(十七歳)

三年級に進む。

四月、山崎校長逝去す。

寮を出て同級の友本小路なる大見達也方に寄寓し通學生となる。これより文學書繙讀の自由を得。「文庫」「新聲」等の雜誌により新文學の感化を受く。和歌を作り始めしも此頃のことなり。

當時、歌文の友に大見達也、鈴木財藏(今の平賀春郊)直井敬三、村井武、百溪祿郎太、小曾戸俊男等あり。大見に教へられて初めて投書といふを知り、桂露なる雅號を用ひて中學文壇に投じ直ちに當選し、諸友驚愕す。「日州獨立新聞」にしきりに詠草を寄す。後、その頃他郷流浪中より歸り來りし從兄若山峻一(冰花と號す)に教へられて「明星」其他の新短歌を知る。

當時、藤村、泣菫の詩を受讀し、夫等及び「一葉全集」をば誦誦するを常とせり。

明治三十五年(十八歳)

二月、同級の鈴木財藏、直井敬三、阿南卓、小曾戸俊男、村井武等とはかりて曙會を起し、毎月一回回覽雜誌「あけぼの」を發行す。後また鈴木大見其他校外の知友と計り野虹會を起し、短歌専門の回覽誌「野虹」を發行す。兩誌とも中學卒業後まで繼續せり。四年級に進む。

雨山(後に白雨、更に野百合とも號す)の雅號にて盛んに新詩社風の歌を作る。

「新聲」「中學世界」「秀才文壇」「國文學」「青年界」「文庫」其他に盛んに歌或は散文を投ず。

九月末、大見方より再び佐久間方に轉ず。十一月、肥筑の野に陸軍の大演習行はれ、大元帥陛下の行幸あり、これを期として全校同地方に修學旅行をなす。牧水は從來修學旅行に參加せず其の間歸郷するを例とせしが級友の勧めにて本年始めて之に參加し第四分隊に長たり。途に各隊軍歌を高唱す。牧水の隊はその音頭するところ、彼行くゝ朗吟し以て隊員に唱へしむ。期せずして首尾一貫せる軍歌をなす。同旅行の一挿話なり。七日出發、演習拜觀

の後阿蘇登山をなし大分縣下を経て二十日歸校。
この年、後日牧水の文學專攻を決心する因を興へたる柳田友麿氏英語教師として赴任す。

明治三十六年（十九歲）

二月中旬、胃及び肝臓を病む。旬日餘にして快癒。五年級に進む。

四月末、遠縁に當る中學の教師黒木藤太氏方に轉宿す。

五月、校友會雜誌部々長に擧げらる。

年來持續せる父の業醫學を專攻するの方針を變更するの意漸く動く。

教師柳田氏頭腦明敏、受持は英語なれど國漢數行くとして可ならざるはなし。壇上に立ちて琵琶行の詩を誦し、鐵幹、晶子等の新詩を口ずさみ之を生徒に英譯せしむ。同氏の慧眼よく牧水の詩才を識り、醫に趣くことを惜み文學に專念せんことを慫慂したるが如し。

十月下旬、別府大分地方に修學旅行をなす。

十二月中旬、卒業後の目的の相談のため校長御手洗氏を訪ひて早稻田大學入學を勧めらる。

明治三十七年（二十歲）

一月、雅號野百合を牧水と改む。牧は慈母の名まき、水は幼時より水を愛せしと又一つは生家の前を流るる河水に因みてなり。

二月末、卒業後の目的につきしきりに頭を悩ます。柳田氏西洋文學の必要を説き極力早稻田入學を勧めむ。

三月一日、遂に早大文科に學ばむことを決意す。同月、四十七人中七番の成績にて延岡中學校を卒業す。二十九日卒業式。その夜送別會あり、中町の喜壽樓といふに痛飲し快をさけぶ。翌三十日住み馴れし延岡を去りて歸郷の途に就く。

四月一日、歸郷。同四日出郷。上京後麴町區三番町五七伊川方に下宿し、直ちに早稻田大學文學科高等豫科に入學す。二十二日、埼玉縣入間郡富岡村に祖父の生家を訪ひ一泊して歸京。

五月二十二日、本郷西片町に始めて尾上柴舟氏を訪ふ。

上京後まもなく同級の中林蘇水と知りしが、六月、

北原白秋（當時射水と號す。）と知る。

七月十一日より相州葉山なる玉藏院に暮す。

八月七日歸京せしが脚氣にて十六日より玉川に轉地す。

九月十八日東京に歸り牛込區下戸塚四一清致館に北原射水と同宿す。まもなく藤田進一郎と知る。中林蘇水、北原射水、若山牧水の三名自ら「早稻田の三水」と稱す。

明治三十八年（二十一歲）

前年より尾上柴舟氏の門に出入せしが、同氏主宰の車前草社同人となり前田夕暮、正富汪洋、三木露風、有本芳水等と知る。

早稻田大學英文科本科に進級。藤田進一郎、三澤豊、土岐哀果（善麿）、仲田勝之助、安成貞雄、佐藤綠葉の六名と共に北斗會を結び毎週一回集りて小説の創

作批評に努む。後福永挽歌（渙）の加はり來る頃より北斗會を廢し一隅會と改む。授業中その一團のみ遠く他と離れて教室の一隅に割據せしに因る。この會合は同校卒業まで繼續せり。

原田讓二、吉井勇等と知る。暑中休暇中日向に歸省。上京後、大久保余丁町三三石原方に轉宿。

明治三十九年（二十二歲）

七月、歸省、八月末より病臥。

九月中旬上京、牛込區辨天町二〇霞北館に轉宿。

明治四十年（二十三歲）

二月、牛込榎町に中學よりの友直井と同宿す。

四月、同南榎町一七小倉方に直井と共に轉居。

六月末より歸省、途中中國各地、耶馬溪其の他に遊ぶ。なほ歸省中に南日向を巡り、上京の途中、大阪、紀伊大和地方に遊ぶ。

九月、上京、牛込原町二丁目五九阿久津方に轉居。

十月より翌春まで安成真雄等と共に「新聲」(隆文館發行)を編輯す。

十二月、冬期休暇を利用して外房州根本にありて歌作す。滞在十日間、同地に越年す。この頃より某女と戀に陥る。

明治四十一年(二十四歳)

初夏、處女歌集「海の聲」の出版に着手するや印刷半ばにして出版書肆失敗せしため、時偶々卒業試験最中なりしが、尾上柴舟氏に印刷費一部の補助を乞ひなどし自費にて、七月辛くも發行す。表紙畫は平福百穂、書名の文字は土岐哀果の揮毫なり、發行部數七百、その三分の一だに賣れず。貧に迫りて殘本を古本屋に賣却す。一部賣價八錢なりしといふ。

七月、早稻田大學英文科を卒業す。月末より八月上旬まで土岐哀果と共に信州輕井澤に遊び、一旦歸京、名古屋、奈良、大阪、神戸其他所々をめぐりて歸郷。九月末上京。

十二月、牛込區若松町一一八に一戸を借り婆やを雇

ひて暮す。

明治四十二年(二十五歳)

一月末、某女との戀愛のため悶々の情を抱いて外房州根本に遊び二月十一日歸京。

三月十六日、早稻田鶴卷町二五一、八雲館に轉宿す。富田碎花、尾山篤二郎、永代靜雄、光用穆等と知りしもこの頃なり。

四月十八日、本郷聯隊區に於て徴兵検査を受け不合格。

六月中旬より一ヶ月ばかり府下南多摩郡百草山、石坂方にありて第二歌集「獨り歌へる」の編輯をなす。歸京して中央新聞社に入る。

八月中旬、名古屋に遊ぶ。

十一月、中央新聞社退社。

明治四十三年(二十六歳)

一月、名古屋市熱田なる八少女會より「獨り歌へる」を出版す。

三月、書肆東雲堂より詩歌雜誌「創作」を創刊す。

四月上旬、牛込區柳町四九玉信館に轉宿。同月歌集「別離」を東雲堂より出版す。

八月二十二日、實生活の苦しさ一昨年来の戀愛事件との煩に耐へかね二三年は歸らざるつもりにて漂浪の旅に出で、先づ甲州より信州に入り、更に越後に越えむとせしが、愛人との問題にて急に歸京す。旅中、山本鼎、山崎斌等と知る。

十二月下旬、麴町區飯田町三ノ一〇官本方に轉宿。

明治四十四年(二十七歳)

一月、創作社を起し、東雲堂の後援により引續き「創作」を發行す。

二月三日、初めて石川啄木を訪ふ。

四月九日、清水谷公園に創作誌友大會を催す。同月淀橋町柏木九四土屋方に居を移す。郡山幸男(經堂)と知る。

九月、博信堂より歌集「路上」を出版す。同月創作社を解散す。

十月より横濱を漂浪す。

十二月上旬歸京後本郷區本郷三丁目一八東雲館に移りやまと新聞社社會部に入社。約二ヶ月にして退社。

明治四十五年(大正元年)(二十八歳)

三月上旬、「牧水歌話」の出版を待ち、直ちに信州に旅立つ。

四月二日、當時信州桔梗ヶ原に歸省中なりし太田喜志子に逢ひ、それより甲州を経て歸京す。歸京後市外巢鴨町三五一八郡山幸男方にあり。同十三日、石川啄木の臨終に遭ひ種々奔走す。十七日夜近火類焼、郡山と共に小石川區大塚町二五に移る。

五月、原田實、平賀春郊等を同人として「創作」に代るべき短歌雜誌「自然」を發行せしも、一號のみにて止む。同月太田水穂氏夫妻媒酌のもとに喜志子と結婚、新宿町二丁目一四森本酒店の一階に假寓す。二十九日、單身相州三崎に赴き數日滞在、海の歌百餘首を作る。

六月下旬武州御嶽に遊ぶ。

七月下旬、郷里の父危篤の報に接して歸郷す。(間もなく明治大帝崩御、大正と改元)。
九月、東雲堂より歌集「死か藝術か」を出版す。
十一月十四日、父死去。その後郷里に引籠るべく近親者に説かれ、進退に惑ひ煩悶懊惱す。歌集「みなかみ」に残れる破調の歌は多くこの間の作なり。

大正二年 (二十九歳)

一月二日より二月上旬にかけ殆んど九州一巡の旅行を試む。
遂に意を決して周囲の反對怨訴を顧みず五月十五日再び出京の途に上る。途中愛媛縣岩城島なる三浦別荘に滞在、歌集「みなかみ」の編輯をなす。それより明石、大阪、京都等に遊びて六月十七日上京。小石川區大塚窪町二〇番地に一戸を借り、郷里信濃に歸省中四月長男旅人を擧げたる喜志子を呼び寄す。
八月、「創作」を復活し太田水穂氏後援の下に續刊。貧窮の生活を送る。尾山篤二郎の加賀より上京寄寓せしもの頃なり。

九月、綴山書店より「みなかみ」を出版。
十月末、伊豆神子元島の燈臺守なる舊友古賀安治を訪ひ、一週間滞在、その静かなる生活を羨み、自らも燈臺守たらむかなどと空想す。

大正三年 (三十歳)

三月末、數日にわたり創作誌友大會を開催。
四月、新聲社より歌集「秋風の歌」を出版。
七月十六日より約十日間信州佐久地方に遊ぶ。
十月號以後「創作」休刊の止むなきに至る。
十二月、妻喜志子發病、年を越す。

大正四年 (三十一歳)

一月上旬、喜志子小石川雜司ヶ谷なる永樂病院に入院、翌月退院す。
三月、醫者の勧めにより病妻のため神奈川縣三浦郡北下浦村に轉地し、親子三人の静けき朝夕を送る。
四月、自選歌集「行人行歌」を植竹書院より出版。
七月より創刊の太田水穂氏の「潮音」に關係す。

七月中旬、栃木縣喜連川に高鹽青山を訪ひそれより八月中旬まで信州北佐久の春日温泉に滞在す。
十月、博信堂より歌集「砂丘」を出版す。
十二月、長女岬子出生。

大正五年 (三十二歳)

三月上旬より約二週間滯京、その後宮城、岩手、青森、秋田、福島と東北各地を旅行し、五月一日歸宅。
六月、散文集「旅とふる郷」を新潮社より、歌集「朝の歌」を天弦堂より出版。同月一時轉宿す。十月、早稲田文學に發表せし小説「麥の秋」はその時の作なり。親友福永渙一家の同地に移住するあり、また相馬泰三と知る。
七月、單身上京、本郷湯島天神町富士屋(後に梅屋)に下宿、十一月まで五ヶ月間滞在す。
十一月、自選歌集「若山牧水集」を新潮社より出版。
十二月末、俄かに一家を東京に引上げるこゝとなり、小石川區金富町五三番地に移る。

大正六年 (三十三歳)

前年末より「潮音」と關係を斷ち二月より「創作」を復活。同月「和歌講話」を天弦堂より出版す。
四月中旬、郷里より老母姪を伴ひ上京、一ヶ月滞在す。下旬、東雲堂より「わが愛誦歌」を出版。
五月上旬、巢鴨町天神山一二五〇に轉居。
六月上旬、上州妙義山に旅行す。
八月三日出發、二週間にわたり秋田山形より新潟に出で信州に入る旅行をなす。同月夫妻合著の歌集「白梅集」を抒情詩社より出版。
十一月中旬秩父の溪に、同下旬上總大原海岸に遊ぶ。

大正七年 (三十四歳)

一月一日、青森より來訪中の加藤東籬を伴ひ伊豆土肥温泉に赴き、三四日にして歸宅。
二月上旬、單身再び土肥温泉に赴き下旬まで滞在。
四月、次女眞木子生る。
五月、歌集「溪谷集」を東雲堂より出版。同月八日出發、京都に遊び比叡山に一週間籠り、更に大阪、

奈良に遊び和歌の浦より乗船、熊野に行き、奈智に遊び、勝浦より鳥羽に渡り、伊勢を経て六月十日歸京す。

七月、歌集「さびしき樹木」を南光書院より、散文集「海より山より」を新潮社より出版。

十一月十二日出發、上州伊香保より沼田を経て、利根の水上に遊び甲州を経て信州に入り二十九日歸京。

大正八年（三十五歳）

一月一日より三日間千葉縣犬吠崎に遊ぶ。

三月七日より約一週間信州に遊ぶ。

四月中旬、上州磯部に約十日間滞在。

六月上旬、榛名山上湖に遊ぶ。下旬水郷潮來地方に遊び筑波山に登る。

八月上旬、巢鴨町一四九三番地に轉居。同月末より

九月にかけ九十九里片貝に二三日遊ぶ。

九月、紀行文集「比叡と熊野」を春陽堂より出版。

十月下旬より信州星野温泉に滞在、それより信州を

一巡して十一月末に歸京。

十二月下旬、千葉縣大原海岸に二三泊の旅をなす。

大正九年（三十六歳）

二月九日出發、沼津狩野川口より乗船、伊豆松崎港より徒歩天城山を越ゆ。同月聚英閣より選歌集「花咲ける曠野」を出版。

四月上旬、秩父長瀨に遊び二三日にして歸京、直ちにまた千葉縣木更津より北條に遊ぶ。

五月中旬より上州吾妻の溪谷川原湯温泉に約十日滞在、それより草津に出で白根を越え信州に入り木曾を経て月末歸京す。

八月中旬、年來の希望なりし田園の生活に入らむため、静岡縣沼津町在楊原村上香貫に一家の移住を決行す。當時その主宰せる雑誌「創作」も経営困難なりしが、廢刊するに忍びず、義弟長谷川銀作（當時横濱）に經營一切の事務を托し、横濱より發行の運びとなす。沼津移住後は諸新聞雑誌の短歌の選を業とし、比較的静かなる生活を營む。

九月下旬上京、約一週間滞在。

十月九日より三日間富士山麓御殿場より大宮までを歩く。

十一月十五日、愛鷹登山をなす。

十二月、聚英閣より評論集「批評と添削」を出版。

大正十年（三十七歳）

三月中旬より月末まで伊豆湯ヶ島温泉に滞在。同月、新潮社より歌集「くろ土」を出版。

四月、次男生る。富士人と命名。

五月十三日出發、京阪より岡山、高松、京都に遊び健康を害して六月三日歸宅。

七月、紀行文集「静かなる旅をきつつ」をアルスより出版す。

九月十七日出發、信州白骨温泉に約廿日間滞在。それより上高地に出で焼岳を越え飛驒に出で、富山を経て信越線にて十月二十九日歸宅。

大正十一年（三十八歳）

一月一日より土肥温泉滞在、同地にて條蟲の寄生せるを知る。十二日歸宅後間もなく重き流行性感冒に罹る。

三月二十八日より四月中旬にかけて伊豆湯ヶ島温泉に滞在、山櫻の歌を多く詠む。

五月十四日、箱根に杜鵑を聞きに行き一泊。

六月上旬、富士山麓大野原を歩く。同月選歌集「路行く人々の歌」を日本評論社より出版す。

七月、「創作」の經營を再び自己の手に移す。沼津移住も半永久的の決心つきたればなり。

八月六日より條蟲を除くため入院せしも絶食にて身體衰弱し目的を達せずして十一日退院。

九月中旬、名古屋の歌會に出席し木曾川に遊ぶ。下旬、伊豆畑毛温泉に數日滞在。

十月十四日出發、信州上州より下野日光中禪寺等に旅行し、十一月上旬歸宅。

十二月、「短歌作法」を春陽堂より出版。

大正十二年（三十九歳）

一月十六日より二月五日まで土肥温泉に滞在、静養の傍歌集「山櫻の歌」の編輯をなす。
 四月三、四兩日創作社友大會を沼津に開催し會後有志數名と共に數日間湯ヶ島温泉に遊ぶ。
 六月十日より長岡温泉に滞在、十五日歸宅、翌日上京、同月新潮社より出版せし自著歌集「山櫻の歌」の合評會に出席して二十日まで滞京。
 七月十三日より二十一日まで佛法僧鳥を聞くべく三河國鳳來寺山に遊ぶ。
 八月八日より家族と共に西伊豆海岸の古宇に滞在。
 九月一日、同地に一人居残りて大震災に遭ふ。沼津なる家族の安否を氣づかひ直ちに歸宅、その無事なるを喜ぶ。而して京濱地方の知人社友の安否を氣づかひ人をして震災地を歴訪せしめしが、此時自己のいまし物質的に恵まれ居らばとの嘆深し。
 十月二十八日出發、御殿場より籠坂峠を越え甲州に出で八ヶ嶽の裾を経て信州に入り、千曲川上流より更に秩父に遊び十一月十三日歸宅。

大正十三年（四十歳）

一月一日より土肥温泉に滞在、二月二日歸宅。
 三月八日出發、長男旅人を伴ひ、途中九州各地を廻り、亡父十三回忌法養のため日向に歸郷す。四月二十三日、老母を伴ひて歸沼、老母は一ヶ月ばかり滞在ののち、日向に歸る。
 五月、童謡集「小さな鶯」を弘文館より出版す。
 六月中旬、甲州身延より七面山に登る。同月、紀行文集「みなかみ紀行」をマウンテン書房より出版。
 七月上旬、長岡温泉に三四日滞在。
 八月上旬、上香貫より千本濱に轉居す。
 九月、住家建築の資に充つるため前年より内々こころみつありし、自らの半折短冊揮毫會を大きく催すことにし、下旬第一回を沼津にて開催、好成績を挙げ。
 十月十日出發、小田原東京を経て信州に遊び十五日歸宅。
 十一月中旬より下旬にかけて東京にて揮毫會を催す。

大正十四年（四十一歳）

一月一日より五日頃まで伊豆古奈温泉に滞在す。中旬、京阪地方に半折揮毫會を兼ねたる歌會あり、夫妻にて出席、十日餘滞在。
 二月、隨筆集「樹木とその葉」を改造社より出版。中旬岡崎にて半折揮毫會開催。同月半折揮毫會にて得たる金にて沼津市市道町（千本松原の蔭）に約五百坪の土地を求め、四月上旬地鎮祭を行ふ。
 四月十八日出發、信州北佐久地方に揮毫行脚をなし長野、鹽尻、木曾、名古屋を経て五月四日歸宅。
 六月三日出發、美濃大井町、信州各地、名古屋に揮毫行脚をなし二十九日歸宅。八月下旬には千葉縣佐倉町、多古町に、九月上旬には栃木縣喜連川町に、中旬には静岡に各半折揮毫行脚を行ふ。一方、住宅の建築にかかり八月四日上棟式を擧ぐ。真に東奔西走なり。
 十月上旬、新居落成、直ちに移轉。同月二十八日九州方面の半折揮毫行脚に出發、十二月十七日歸宅。

同月、自選歌集「野原の郭公」を改造社より出版す。

大正十五年（昭和元年）（四十二歳）

一月、多年の宿望なりし詩歌綜合雑誌の發行を企て専心その準備をなす。
 四月三、四兩日、創作社々友大會を開く。
 五月よりいよいよ「詩歌時代」を創刊す。各方面に多大の反響あり。五月一日、來訪中の古泉千樞と湯ヶ島温泉に行き一泊。
 六月二十一日出發、濱名湖を舟にて渡り館山寺に參詣、氣賀町より奥山半僧坊に詣で陣座峠を越え三河の新城町に出で、鳳來寺山に遊び二十五日歸宅。
 八月、静岡縣當局に千本松原伐採處分の議ありて沼津市に反對運動起る。牧水その急先鋒となり各種新聞紙上に千本松原擁護の文章を寄せ、九月十一日夜同市劇場國技館に開かれたる「千本松原伐採反對市民大會」に出席して熱辯をふるふ。松原處分問題は遂に立消となる。なほ非常なる意氣込にて始めし「詩歌時代」經營難に陥りしかば、止むなく十月號限り

にて廢刊の決意をなし、缺損補填その他のためまた
 〳〵苦しき半折行脚を思ひ立ち、喜志子同伴九月二
 十一日北海道に向けて出發、各地に苦しき旅行をな
 し、七十餘日を経て、十二月六日歸宅す。

昭和二年（四十三歳）

一月九日、知人の墓參のため三河新城町に起き一泊、
 豊川稻荷に詣でて歸宅。十一日より十八日まで長岡
 温泉に滞在。

二月十七日、静岡より宇都の谷峠を越え岡部に一泊
 して歸宅。

三月七日、折から雪中の箱根に遊び翌日歸宅。二十
 七日より湯ヶ島温泉に遊び二泊。

四月七日より富士山麓佐野五龍館に二泊。

五月四日、夫妻同伴、朝鮮旅行に出づ。例の揮毫行
 脚なれど、また漫遊の意も大なりしが如し。然れど
 も氣候風土の慣れざると積年の行脚の疲勞とにて七
 月初旬脚を病みて退鮮、歸途郷里日向の國坪谷に老
 母を見舞ひ亡父の墓參をなし、好める山川の寫真十

數葉を撮らせなどして七月末歸宅。二ヶ月餘を脚部
 の疾患のために苦しむ。九月上旬より中旬にかけ約
 二週間伊豆船原温泉に入湯、漸次快方に向ひしが、
 爾來神經衰弱症に罹り、兎角健康すぐれず、自宅に
 引籠りがちなりき。

昭和三年（四十四歳）

三月四日出發、箱根を越え東伊豆を一巡し天城を越
 えて十一日歸宅。

五月上旬、草鞋脚絆にて西伊豆を江梨まで二三泊の
 小旅行をなす。十日出發東京を経て千葉縣に入り縣
 下各地を旅行の筈なりしも健康を害し市川町にて止
 め十二日歸宅。

八月末、甲州下部温泉に赴き、滞在靜養の筈なりし
 も湯治客雜沓のため二泊にして歸宅す。

九月初旬、日光浴のため兩足蹠部に火傷を負ひ臥床、
 それより下痢發熱と共に種々の故障起り全身的に衰
 弱甚しく急性腸胃加答兒兼肝臟硬變症にて十三日醫
 師より重態を宣告され、十七日朝七時五十八分、遂

に永眠す。十九日午後告別式、直ちに荼毘に附し遺
 骨は沼津市濱道乘蓮寺の墓地に葬らる。法名、古松
 院仙譽牧水居士。

附記。

歿後間もなく沼津有志の主唱にて生前熱愛の地な
 る千本松原に歌碑の建設さることとなり全國有
 志の寄附金にて工事に着手、昭和三年七月竣工、
 同月二十一日盛大なる除幕式舉行さる。碑石は富
 士山麓より運び來れる大自然石、歌は代表作の一
 として人口に膾炙せる「幾山河こえさりゆかば寂
 しさのてなむ國ぞけふも旅ゆく」の一首なり。
 昭和四年八月より「牧水全集」全十二卷、改造社
 よ、刊行さる。

卷 末 記

○本巻には前巻に續く大正十三年以降の書簡及び日記年譜を収めた。
○書簡については前巻の巻末記を参照していただきたい。
○日記は明治三十五、六兩年分は抜萃、その他は全文をそのまま収めた。殆んど皆博文館發行の日記に書かれたものであるが、例外として明治四十五年分は普通の縦罫のノートブック、そしてその表紙には「我等つねに鮮かに生きざる可からず」と記されて居る。なほ大正十二年分は雜誌の原稿として書いたものだから、他の日記とはちよつと様子がちがふ。
○年譜所載の著書のうち「わが愛誦歌」は他人の手になつた箇所があり完全なる自著とは言ひ難い。なほ大正五年新潮社出版金子薫園氏との共著「代表歌選」はほんの名を列ねたばかりであつた。それから年譜所載の著書以外に短歌作法書などで若山牧水の名を用ゐたものが二三出てゐるらしいが、それは偽物である。
○口繪寫眞の一は日向の生家から見たもので、すぐ前の川は坪谷川、向うに見えるのは尾鈴の連峯である。三は七九頁所載三五の手紙。四の告別式場は自宅、九月十九日式前に撮影したものである。(大悟法利雄記)

昭和五年七月十三日印刷
昭和五年七月十五日發行



發兌

東京市芝區愛宕下町
四丁目四十番地

改

振替口座東京
電話芝(43) 八四〇二
番番番番番番社

著者 若山 牧水
發行者 山本 三生
印刷者 竹內 喜太郎
東京市芝區愛宕下町四丁目四十番地
東京市牛込區櫻町七番地

牧水全集 第十二卷

(兩角製本)

刷印社會式株刷印滿日

編輯顧問	北原白秋	土岐善麿	平賀春郊	福永藤綠	佐藤葉	裝幀	森田恒友	題簽	福永 渙	編輯校訂	若山喜志子	大悟法利雄
------	------	------	------	------	-----	----	------	----	------	------	-------	-------





